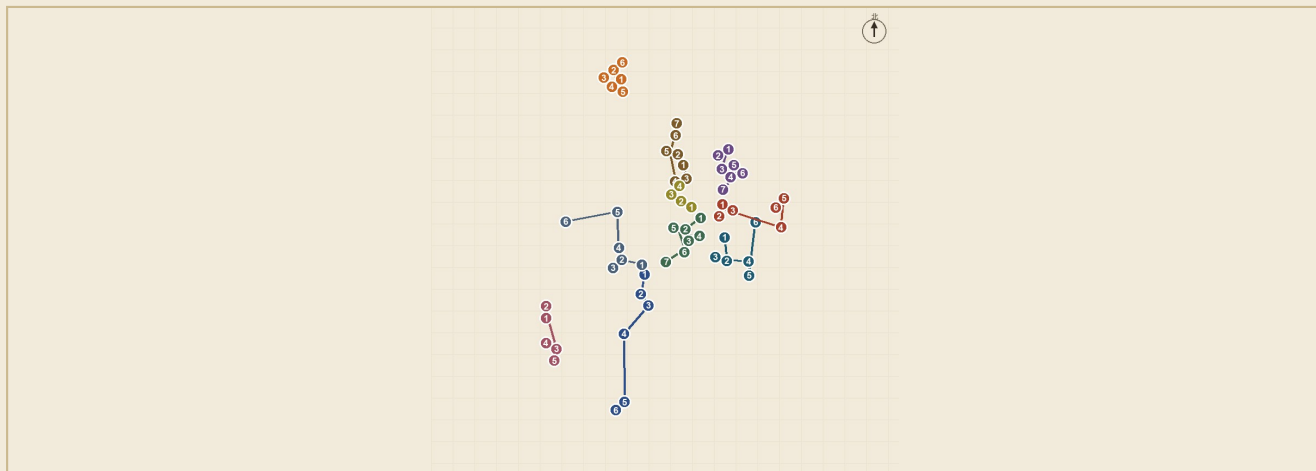


江戸名所百景

いまむかし散歩

歌川広重「名所江戸百景」に描かれた場所を、現在の地図・住所と見比べながら歩くための散歩ガイド。第1弾は深川エリアと本所・両国・亀戸エリアの2ルート、第2弾は浅草エリアを収録。



- **深川ルート 全6景**
都営大江戸線・東京メトロ東西線 門前仲町駅 → 東京メトロ東西線 木場駅(徒歩約3.5km)
- **本所・両国・亀戸ルート 全6景**
JR総武線・都営大江戸線 両国駅 → JR総武線・東武亀戸線 亀戸駅(徒歩約4.5km)
- **浅草ルート 全7景**
東京メトロ日比谷線 三ノ輪駅 → 都営浅草線・都営大江戸線 蔵前駅(徒歩約3.5km)
- **日本橋・京橋ルート 全7景**
東京メトロ日比谷線 小伝馬町駅 → 東京メトロ銀座線 銀座駅(徒歩約3.2km)
- **上野・谷中・根岸ルート 全7景**
JR 上野駅 → JR 西日暮里駅(徒歩約3.5km)
- **王子・飛鳥山ルート 全6景**
JR京浜東北線・東京メトロ南北線 王子駅 → 都電荒川線 飛鳥山駅(徒歩約2.8km)
- **品川・高輪ルート 全6景**
東京メトロ日比谷線 神谷町駅 → 京急本線 鮫洲駅(徒歩約5.5km)
- **目黒ルート 全5景**
東急東横線 中目黒駅 → 東急目黒線 不動前駅(徒歩約3.0km)
- **神田ルート 全4景**
JR・東京メトロ 神田駅 → JR 御茶ノ水駅(徒歩約2.2km)
- **赤坂・四谷ルート 全6景**
東京メトロ 虎ノ門駅 → 都営新宿線・丸ノ内線 新宿三丁目駅(徒歩約4.6km)

深川ルート

江東区(門前仲町・清澄白河・木場)

門前仲町から清澄白河・木場方面へ、深川の水辺の名所をたどるルート。



起点: 都営大江戸線・東京メトロ東西線 門前仲町駅

終点: 東京メトロ東西線 木場駅

徒歩距離目安: 約3.5km

順路

- ① 深川万年橋 → 万年橋 (滞在目安 約15分)
- ② 深川八まん山ひらき → 富岡八幡宮(通称・深川八幡宮) (滞在目安 約20分)
- ③ 深川三十三間堂 → 三十三間堂跡(建物は現存せず) (滞在目安 約5分)
- ④ 深川木場 → 木場公園 (滞在目安 約20分)
- ⑤ 深川洲崎十万坪 → 洲崎神社 (滞在目安 約10分)
- ⑥ 小奈木川五本まつ → 小名木川五本松(碑・復元) (滞在目安 約5分)

この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →

エリアのグルメ



深川めし(深川丼・あさりめし)

深川宿 富岡八幡店

あさりと葱を味噌または醤油ベースの汁でぶっかける、漁師町ならではの一杯飯。船の上でも手早くかき込めるよう生まれた、いわば江戸の「ファストフード」でした。富岡八幡宮の境内に店を構える。

江東区富岡1-23-11 富岡八幡宮境内

適切なライセンスの写真が見つからなかったため未掲載です

甘味・和菓子

深川伊勢屋 本店

明治40年(1907)創業、深川不動堂の参道にある老舗和菓子店。名物の団子や、深川名物あさりめしも味わえる、地元で長く愛されてきた一軒。

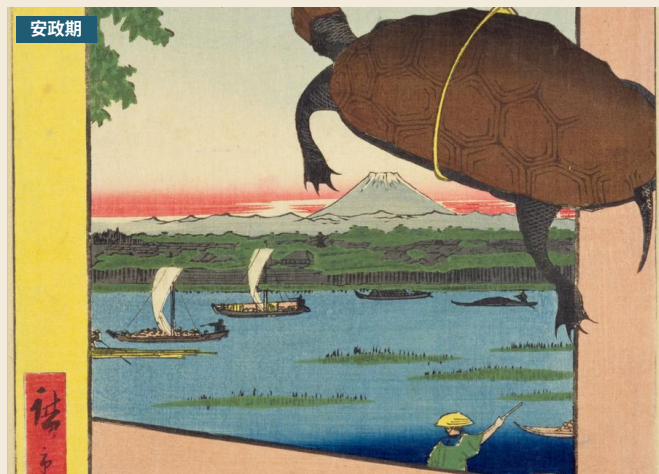
江東区富岡1-8-12

1

深川万年橋

Mannen Bridge, Fukagawa

安政4年(1857)11月 / No.32(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 深川万年橋」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by jmho, Wikimedia Commons(Public Domain)

浮世絵を読み解く

橋の欄干からぶら下がる亀に目を凝らしてください。ただの亀ではなく、放生会(ほうじょうえ)で川へ逃がすために売られていた「商品」です。「鶴は千年、亀は万年」——万年橋の名にかけた広重お得意の洒落で、亀の甲羅越しにちゃっかり富士山まで覗かせる、江戸っ子好みの一枚。

最寄り駅: 都営大江戸線 清澄白河駅から徒歩7分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

深川万年橋

いまの場所

万年橋

江東区清澄1丁目・常盤1丁目(小名木川が隅田川に注ぐ地点)

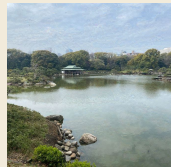
歴史

橋のすぐそばには、俳人・松尾芭蕉が晩年を過ごした芭蕉庵の跡地(芭蕉稲荷神社)があります。あの「古池や蛙飛びこむ水の音」も、実はこの界隈で詠まれたという説があるほど。今の橋は関東大震災からの復興橋(昭和5年/1930)で広重が見た橋そのものではありませんが、水と橋のある風景と芭蕉ゆかりの地という空気は、160年以上経った今もちゃんと息づいています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

清澄庭園

徒歩7分ほど



三菱財閥の創業者・岩崎弥太郎が、社員の慰安や賓客のおもてなしのために造った回遊式庭園。大小の名石を池に配した「磯渡り」が名物で、水辺つながりで足を延ばすのにぴったり。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://www.nippon.com/ja/guide-to-japan/gu004043/>

2

深川八まん山ひらき

Open Garden at Fukagawa Hachiman Shrine

安政4年(1857)8月 / No.13(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 深川八まん山ひらき」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Guilhem Vellut, Wikimedia Commons(CC BY 2.0)

浮世絵を読み解く

年に一度だけ扉が開く、特別公開の庭。富岡八幡宮の別当寺・永代寺の庭園は普段は非公開でしたが、弘法大師の命日法会にあわせて「山ひらき」として開放されました。ツツジやハナカイドウが咲き乱れる池端を、花見客でごったがえす一大イベントとして広重は描いています。

最寄り駅: 東京メトロ東西線 門前仲町駅から徒歩4分 滞在目安: 約20分

広重が描いた場所

深川八まん山ひらき

いまの場所

富岡八幡宮(通称・深川八幡宮)
江東区富岡1-20-3

歴史

この八幡様、実はある偉業の出発点でもあります。日本地図を作った測量家・伊能忠敬は、すぐ近くの深川黒江町(現・門前仲町1丁目)に暮らし、蝦夷地(北海道)へ向かう第一歩となった寛政12年(1800)の測量旅行をはじめ、10回の旅の出発前には必ずここで無事を祈願しました。2001年に建てられた境内の伊能忠敬像は、まさにその「出発の一步」を再現した姿です。広重が描いた永代寺の庭園自体は明治の廃仏毀釈で失われましたが、8月の例大祭「深川八幡祭り」は江戸三大祭のひとつとして今も健在です。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

深川不動堂

徒歩1分

成田山新勝寺の東京別院で、富岡八幡宮のすぐ隣。護摩祈祷の太鼓と読経が絶えない、下町らしい熱気のあるお寺です。



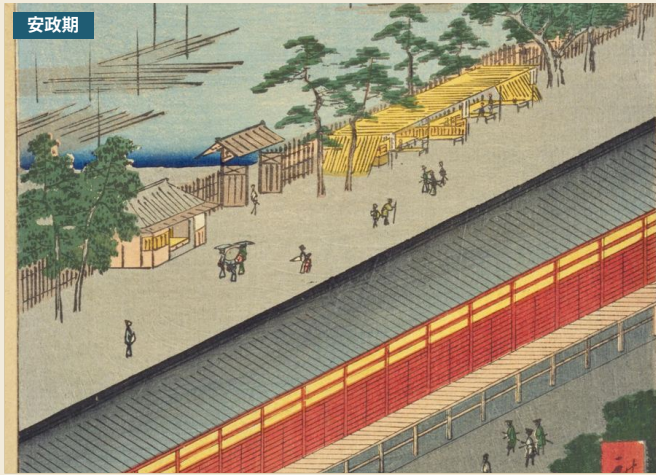
[この場所をGoogleマップで見る →](#)

3

深川三十三間堂

Hall of Thirty-Three Bays, Fukagawa

安政4年(1857)8月 / No.91(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 深川三十三間堂」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Tak1701d, Wikimedia Commons(Public Domain)

浮世絵を読み解く

京都の三十三間堂をそっくり移築した、スケールの大きい話。名物は本堂の軒下を矢で射通す「通し矢」競技で、若者たちが丸一日かけて矢数を競いました。

最寄り駅: 門前仲町駅から徒歩8分 滞在目安: 約5分

広重が描いた場所

深川三十三間堂

いまの場所

三十三間堂跡(建物は現存せず)

江東区富岡2丁目付近

歴史

元禄16年(1703)、この地で驚異の記録が生まれました。石川美作守の家臣・梶川勝蔵という、なんと12歳の少年が一昼夜で1万本以上(10,011本)もの矢を射通したのです。そんな熱気に包まれたお堂も、元禄14年(1701)の移築から明治5年(1872)の解体まで170年ほどの命。今では跡地はごく普通の住宅地で、通し矢の熱気を伝えるのは小さな碑ひとつだけです。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

法乗院(深川えんま堂)

徒歩5分ほど

高さ3.5mの巨大な閻魔大王像が本尊。賽銭を投げ入れると、願い事の種類のに応じて100種類以上のお告げをしてくれる、ちょっと変わったお寺です。



この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: https://koto-kanko.jp/tourism/detail_spot.php?sid=S00104

4

深川木場

Fukagawa Lumberyards

安政3年(1856)8月 / No.24(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 深川木場」 国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Kentin, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

雪の日、材木を組んだ筏の上を身軽に渡り歩く木場の職人。足場も命綱もない丸太の上を平然と歩く姿は、現代人からすると目眩がする曲芸すれすれの日常風景でした。

最寄り駅: 東京メトロ東西線 木場駅から徒歩5分 滞在目安: 約20分

広重が描いた場所

深川木場

いまの場所

木場公園

江東区木場4丁目・平野4丁目 一帯

歴史

この材木の町を語る上で欠かせないのが、豪商・紀伊国屋文左衛門。元禄期に幕府御用達の材木商として巨万の富を築き、店を深川に移して今の木場の礎を築いたとも言われる伝説の人物です。吉原を一晩借り切って豪遊した、大坂で疫病が流行ると聞くや江戸中の塩鮭を買い占めて相場を動かした、といった破天荒な逸話に事欠きません。晩年は深川一の鳥居近くでひっそり暮らしたとか。その木場も、貯木場は昭和末に新木場へ移転し、水面の多くは埋め立てられて木場公園になりました。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

東京都現代美術館(MOT)

木場公園内

木場公園の中にある、日本最大級の現代美術の美術館。広い公園を歩いたあとにアートで一息つきのにちょうどいい距離です。



[この場所をGoogleマップで見る →](#)

5

深川洲崎十万坪

Fukagawa Susaki Jū mantsubo

安政4年(1857)閏5月 / No.25(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 深川洲崎十万坪」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Mizushimasea, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

雪の舞う空から、一羽の鷺が獲物めがけて急降下する——静止した一枚の絵に、これほどの躍動感を詰め込んだ広重の技巧に脱帽です。海側から見下ろす鳥瞰構図で、荒涼とした埋立地の冬景色を描いています。

最寄り駅: 木場駅から徒歩2分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

深川洲崎十万坪

いまの場所

洲崎神社

江東区木場6-13-13

歴史

初日の出や月見、潮干狩りを楽しむ行楽地として賑わったこの一帯は、寛政3年(1791)の大津波で一変。壊滅的な被害を受け、以来長らく人の住めない土地になりました。今も残る洲崎神社の「波除碑」が、その教訓を静かに伝えています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

富岡八幡宮(元八幡)

徒歩15分ほど

富岡八幡宮の「本家」を名乗る、通称「元八幡」。深川の八幡様のルーツをたどりたい人向けの、少し足を伸ばした先にある穴場です。



この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://susakijinja.or.jp/>

6

小奈木川五本まつ

Five Pines, Onagi Canal

安政3年(1856)7月 / No.89(太田記念美術館リスト番号)



現地は小さな碑と復元の松のみで、著作権フリーで使える適切な現地写真が見つからなかったため未掲載です

歌川広重「名所江戸百景 小奈木川五本まつ」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

浮世絵を読み解く

実はまっすぐな小名木川を、広重はわざと大きく湾曲させて描きました。理由は単純、その方が五本松の枝ぶりが映えるから。塩を運ぶ行徳船が松の枝の下をくぐり抜ける、演出過剰気味だけど憎めない一枚です。

最寄り駅: 都営新宿線 住吉駅から徒歩12分 滞在目安: 約5分

広重が描いた場所

小奈木川五本まつ

いまの場所

小名木川五本松(碑・復元)

江東区猿江2-16

歴史

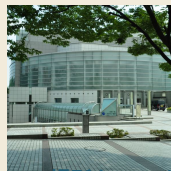
この松、なんと8代将軍・徳川吉宗のお墨付きでした。九鬼家の屋敷から川面に張り出した見事な枝ぶりを吉宗が褒めたことから江戸中の評判となったと伝わります。松尾芭蕉もこの木陰に舟を停め、「川上とこの川しもや 月の友」の句を残しました。将軍と俳聖、両方に愛されたこの松は明治末に一度枯れましたが、昭和63年(1988)に現在地で復活。80年越しの里帰りを果たしました。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

猿江恩賜公園

碑は公園内にあります

五本松の碑が実際に立っている、広い都立公園。かつて材木蔵があった場所で、木場と並ぶ深川の「木の町」としての歴史を今に伝えます。



この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://www.city.koto.lg.jp/103020/bunkasports/bunka/bunkazaisiseki/shiseki/16075.html>

本所・両国・亀戸ルート

墨田区(両国) → 江東区(大島・亀戸)

両国橋周辺から北東へ、旧本所・亀戸方面の名所をたどるルート。



起点: JR総武線・都営大江戸線 両国駅

終点: JR総武線・東武亀戸線 亀戸駅

徒歩距離目安: 約4.5km

順路

- ① 両ごく回向院元柳橋 → 回向院 (滞在目安 約15分)
- ② 両国橋大川ばた → 両国橋 (滞在目安 約10分)
- ③ 両国花火 → 隅田川花火大会(会場は移動) (滞在目安 約5分)
- ④ 五百羅漢さゝみ堂 → 羅漢寺(名跡のみ。名所江戸百景当時の五百羅漢像は現・天恩山五百羅漢寺(目黒区)へ移転) (滞在目安 約10分)
- ⑤ 亀戸天神境内 → 亀戸天神社 (滞在目安 約20分)
- ⑥ 亀戸梅屋舗 → 梅屋敷跡の碑(北十間川沿い) / 亀戸梅屋敷(観光施設) (滞在目安 約15分)

この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →

エリアのグルメ



ちゃんこ鍋 ちゃんこ 川崎

元力士が暖簾を掲げた、昭和12年創業のちゃんこ鍋の老舗。鶏がら出汁の「ソップ炊き」を守り続け、ミシュランガイド東京でビブグルマンの常連という隠れた名店です。

墨田区両国2-13-1



亀戸餃子 亀戸餃子 本店

メニューは餃子のみ、という潔さで勝負する専門店。亀戸駅北口を出てすぐ、行列必至の人気ぶりです。

江東区亀戸5-3-3



くず餅 船橋屋 亀戸天神前本店

文化2年(1805)創業、実に450日もかけて発酵させる「発酵くず餅」の元祖。亀戸天神にお参りしたら、ここに寄らずに帰るのはもったいない老舗です。

江東区亀戸3-2-14

1

両ごく回向院元柳橋

Ek ō in Temple, Ry ō goku and Moto-Yanagibashi Bridge

安政4年(1857)閏5月 / No.41(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 両ごく回向院元柳橋」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Morio, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

高さ約17メートル、ビル5階分はある巨大な櫓太鼓——相撲の本場所開催を知らせるこの櫓を手前に大きく配し、隅田川越しに兩岸の町並みと富士山を見渡す俯瞰構図。安政4年(1857)は前年の大地震・台風から立ち直る途中の年で、広重は相撲という「日常が戻ってきた」象徴に、江戸の人々への応援歌を重ねたとされています。

最寄り駅: JR両国駅から徒歩3分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

両ごく回向院元柳橋

いまの場所

回向院

墨田区両国2-8-10

歴史

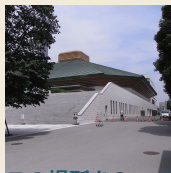
明暦の大火(1657)の無縁仏を弔うために建てられた回向院では、江戸勤進相撲が年2回の恒例行事として開催されました。生涯成績254勝10敗、勝率9割6分という空前絶後の記録を残し「史上最強の力士」とも称される雷電為右衛門も、21年の現役生活でこの土俵に何度も上がっています。ここが今の大相撲・両国国技館へとつながる系譜の原点です。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

両国国技館

徒歩5分ほど

大相撲の本場所が開かれる、相撲の殿堂。回向院の勤進相撲から続く歴史の「今」を見に行けます。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://www.nippon.com/ja/guide-to-japan/gu004104/>

2

両国橋大川ばた

Ryōgoku Bridge and the Great Riverbank

安政3年(1856)8月 / No.99(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 両国橋大川ばた」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン) Photo by Ryu ohsako, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

両国広小路からの俯瞰で、両国橋を画面中央に据え、隅田川上流や本所・向島方面を望む大胆な構成。旧暦5月28日から8月28日までの夕涼み期間、火除け地に立ち並んだ葦簀張りの茶屋や見世物小屋で賑わう、江戸一番の夏の盛り場の光景が描かれています。

最寄り駅: JR/都営 両国駅から徒歩5分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

両国橋大川ばた

いまの場所

両国橋

西岸: 中央区東日本橋2丁目 / 東岸: 墨田区両国1丁目

歴史

この橋が架けられたきっかけは、江戸史上最大の大火・明暦の大火(1657)。恋煩いで亡くなった娘の振袖を焼いた寺の炎が強風で燃え広がった、という「振袖火事」の伝説でも知られるこの大火では、逃げ場を失った人々が隅田川に阻まれて命を落としました。その教訓から架けられたのが両国橋。悲劇から生まれた橋が江戸一番の歓楽街に育つという、たくましいサクセスストーリーです。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

すみだ北斎美術館

徒歩5～9分

両国生まれの浮世絵師・葛飾北斎の美術館。広重のライバルであり、この先の五百羅漢さゞる堂を違う角度から描いた北斎の仕事をまとめて見られます。



この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://www.nippon.com/ja/guide-to-japan/gu004068/>

3

両国花火

Fireworks at Ryōgoku

安政5年(1858)8月 / No.113(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 両国花火」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by てんどん, Wikimedia Commons(CC BY 2.1 Japan)

浮世絵を読み解く

夜空の花火と、それを見上げる無数の屋形船・涼み船で埋め尽くされた隅田川。写真もSNSもない時代、この一瞬の輝きをどう伝えるか——広重が選んだ答えが、この賑やかな水面の一枚でした。

最寄り駅: 両国橋周辺 / 会場は浅草・蔵前方面 滞在目安: 約5分

広重が描いた場所

両国花火

いまの場所

隅田川花火大会(会場は移動)

現在の主会場は両国橋よりやや上流の浅草・駒形橋～厩橋周辺、桜橋～言問橋周辺

歴史

始まりは享保18年(1733)、8代将軍・徳川吉宗の命による「両国川開き」。前年の享保の大飢饉と疫病で亡くなった人々の慰霊と厄除けを願って打ち上げられた鎮魂の花火が、いつしか江戸随一の納涼イベントに育ちました。昭和36年(1961)に一旦中断し、昭和53年(1978)に隅田川花火大会として復活しましたが、会場は両国から上流の浅草方面へ移りました。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

江戸東京博物館

徒歩1～3分

2026年3月末に4年越しのリニューアルオープンをしたばかりの、江戸から東京への歴史をまるごと体感できるミュージアム。ちょうど今、行くのに良いタイミングです。



この場所をGoogleマップで見える →

浮世絵原画・解説: <https://www.sumidagawa-hanabi.com/about/>

4

五百羅漢さゝる堂

Spiral Hall, Five Hundred Rakan Temple

安政4年(1857)8月 / No.88(太田記念美術館リスト番号)



安政期



いま

歌川広重「名所江戸百景 五百羅漢さゝる堂」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン) Photo by あばさー, Wikimedia Commons(Public Domain)

浮世絵を読み解く

サザエの殻のように、内部がぐるぐる三層のらせん状になった変わり種のお堂。上りきった最上階からは江戸の町並みが一望でき、あの葛飾北斎までもがこの絶景に魅せられて絵にしたほどの人気展望スポットでした。

最寄り駅: 都営新宿線 西大島駅すぐ 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

五百羅漢さゝる堂

いまの場所

羅漢寺(名跡のみ。名所江戸百景当時の五百羅漢像は現・天恩山五百羅漢寺(目黒区)へ移転)
江東区大島3-1-8

歴史

「本所のらかんさん」として親しまれたこのお寺は、たび重なる水害に見舞われて衰退。明治42年(1909)、五百羅漢像ごと目黒へ引っ越してしまいました(現在の天恩山五百羅漢寺)。今の場所には後から別のお寺(羅漢寺)が入居している、いわば「テナントが入れ替わった」状態です。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

大島稻荷神社



松尾芭蕉が詠んだ句の碑「女木塚碑」が残る神社。津波の記憶と、芭蕉ゆかりの土地としての顔をあわせ持ちます。

少し足を伸ばして

この場所をGoogleマップで見ると

浮世絵原画・解説: <https://www.city.koto.lg.jp/103020/bunkasports/bunka/bunkazaisiseki/shiseki/16117.html>

5

亀戸天神境内

Inside Kameido Tenjin Shrine

安政3年(1856)7月 / No.21(太田記念美術館リスト番号)



安政期



いま

歌川広重「名所江戸百景 亀戸天神境内」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Takuro1202, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

太鼓橋を、恐る恐る手をつないで降りる母子——広重は名所の建物だけでなく、そこに暮らす人々の何気ない一瞬もちゃんと拾い上げています。境内の藤棚と合わせ、春の亀戸天神の華やかさを伝える一枚です。

最寄り駅: JR/東武亀戸線 亀戸駅から徒歩15分、または錦糸町駅からバス 滞在目安: 約20分

広重が描いた場所

亀戸天神境内

いまの場所

亀戸天神社

江東区亀戸3-6-1

歴史

祀られているのは学問の神様・菅原道真。平安時代の右大臣でありながら政争に敗れて九州・太宰府に左遷され、失意のうちに没した後、都で災いが相次いだため「祟り」を鎮めるべく神格化されたという、なかなかドラマチックな経歴の持ち主です。社殿の造りが太宰府天満宮そっくりなことから「東宰府天満宮」の別名も。広重が描いた太鼓橋と藤棚は、今も春の藤まつりの時期にほぼ同じ姿で参拝者を迎えています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

亀戸香取神社

徒歩10分ほど



「スポーツ振興の神様」として、多くのアスリートが必勝祈願に訪れる神社。亀戸天神からさらに足を延ばす価値あります。

[この場所をGoogleマップで見ると](#)浮世絵原画・解説: <https://www.nippon.com/ja/guide-to-japan/gu004001/>

6

亀戸梅屋舗

Plum Park in Kameido

安政4年(1857)11月 / No.2(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 亀戸梅屋舗」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Souka Kinmei, Wikimedia Commons(CC0)

浮世絵を読み解く

地を這う龍のような枝ぶりから「臥龍梅」と呼ばれた奇木を、画面いっぱいにクローズアップ。この思い切った構図に世界が反応し、印象派の巨匠ゴッホがわざわざ油絵で模写したことも有名です。名所江戸百景の中でも、海外での知名度はナンバーワンかもしれません。

最寄り駅: 亀戸駅北口から徒歩5分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

亀戸梅屋舗

いまの場所

梅屋敷跡の碑(北十間川沿い) / 亀戸梅屋敷(観光施設)

碑: 江東区亀戸3丁目 北十間川沿い / 観光施設: 江東区亀戸4-18-8

歴史

「臥龍梅」の名付け親は、あの水戸黄門こと徳川光圀と伝わります。庭を訪れた光圀が、地面を這うような枝ぶりを見て「まるで龍が伏せているようだ」と名付けたのだとか。将軍家ゆかりの銘木も、明治43年(1910)の水害であっけなく失われましたが、跡地には碑が、少し離れた場所には「亀戸梅屋敷」という観光施設が作られ、往時の記憶を今に伝えています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

龍眼寺(萩寺)



亀戸梅屋敷の交差点のすぐ向かい。江戸時代から「萩寺」として親しまれ、秋には百種の萩が咲き誇ります。亀戸七福神の布袋尊も祀られています。

交差点の向かい

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://www.nippon.com/ja/guide-to-japan/gu004030/>

浅草ルート

台東区(千束・浅草・蔵前)

吉原・鷲神社のあたりから浅草寺・隅田川沿いを通り、蔵前まで歩くルート。



起点: 東京メトロ日比谷線 三ノ輪駅

終点: 都営浅草線・都営大江戸線 蔵前駅

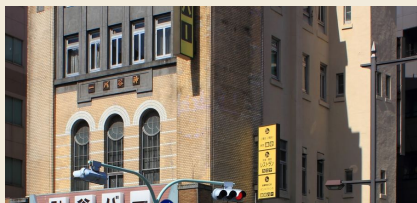
徒歩距離目安: 約3.5km

順路

- ① よし原日本堤 → 日本堤(通り名として名残) (滞在目安 約10分)
- ② 浅草田甫西の町詣 → 鷲神社 (滞在目安 約15分)
- ③ 猿わか町よるの景 → 猿若町跡(現・浅草6丁目、浅草演芸ホール周辺) (滞在目安 約10分)
- ④ 浅草金龍山 → 浅草寺・雷門 (滞在目安 約30分)
- ⑤ 真乳山山谷堀夜景 → 待乳山聖天(本龍院) (滞在目安 約15分)
- ⑥ 吾妻橋金龍山遠望 → 吾妻橋 (滞在目安 約10分)
- ⑦ 浅草川首尾の松御厩河岸 → 首尾の松(石碑・復元) (滞在目安 約10分)

[この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →](#)

エリアのグルメ



電気ブラン 神谷バー

明治13年(1880)創業、日本で最初の洋風バー。ブランデーをベースにした名物カクテル「電気ブラン」は、電気が珍しかった時代に「新しいもの」の象徴としてこの名がつけました。

台東区浅草1-1-1



どぜう鍋 駒形どぜう

享和元年(1801)創業。どじょうを丸ごと甘辛く煮込む「どぜう鍋」一筋の老舗。畳に座って鍋をつつく、江戸の庶民の味そのまの食べ方が今も守られています。

台東区雷門周辺(駒形)



栗ぜんざい 浅草 梅園

安政元年(1854)創業、元祖あわせんざいの甘味処。浅草寺の塔頭「梅園院」の一角にあったのが店名の由来です。

台東区浅草1-31-12

1

よし原日本堤

Nihon Embankment and Yoshiwara

安政4年(1857)4月 / No.109(太田記念美術館リスト番号)



遊郭の名残を示す適切な現地写真が見つからなかったため未掲載です

歌川広重「名所江戸百景 よし原日本堤」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

浮世絵を読み解く

吉原へと続く土手道「日本堤」を描いた一枚。駕籠に乗った客たちが、田んぼの中を一直線に延びる堤を進んでいく構図で、これから遊里へ向かう高揚感と、まわりの静かな田園風景の対比が印象的です。

最寄り駅: 東京メトロ日比谷線 三ノ輪駅から徒歩10分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

よし原日本堤

いまの場所

日本堤(通り名として名残)

台東区日本堤・千束エリア

歴史

吉原はもともと日本橋人形町にありましたが、明暦の大火(1657)で焼け出されたのを機に、当時はまだ田んぼが広がるだけだったこの浅草の地へ移転しました。以後「新吉原」として、幕末まで200年以上にわたり江戸最大の遊里であり続けます。周囲を堀で囲み、出入り口は日本堤に面した大門ひとつだけという、逃亡を防ぐための閉ざされた作りでした。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

吉原神社

徒歩5分ほど

新吉原の四隅にあった稲荷社をまとめて祀る神社。花魁たちの参拝の記録も残る、遊里の守り神です。



この場所をGoogleマップで見る →

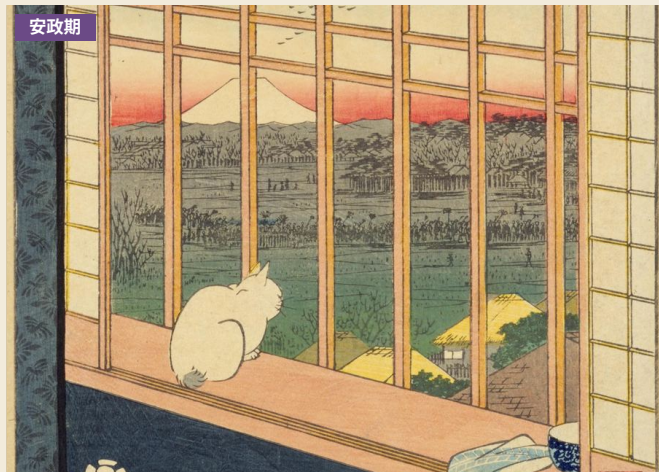
浮世絵原画・解説: [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%90%89%E5%8E%9F_\(%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%90%89%E5%8E%9F_(%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD))

2

浅草田甫酉の町詣

Asakusa Ricefields and Torinomachi Festival

安政4年(1857)11月 / No.5(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 浅草田甫酉の町詣」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Jerry fish tkc, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

吉原の見世(遊女屋)の二階から、田んぼ越しに鷺神社の「酉の市」へ向かう人々を見下ろす構図。窓辺には遊女の後ろ姿と衣紋掛けの着物が描かれ、遊郭の中から外の賑わいを眺めるといふ、少し切ない視点が特徴的です。

最寄り駅: 東京メトロ日比谷線 入谷駅から徒歩7分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

浅草田甫酉の町詣

いまの場所

鷺神社

台東区千束3-18-7

歴史

鷺神社の「酉の市」は江戸時代から続く年中行事で、開運招福の縁起物「熊手」を売る屋台が、今も11月の酉の日に境内を埋め尽くします。このすぐ近くの竜泉という町は、のちに小説家・樋口一葉が「たけくらべ」の舞台とした場所でもあります。一葉自身、吉原のそばで荒物・雑貨屋を営みながらこの作品を書き上げました。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

一葉記念館

徒歩10分ほど



「たけくらべ」を書いた樋口一葉の資料を集めた記念館。一葉が実際にこの近くで暮らし、店を営んでいた縁の地に建っています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: https://www.fujibi.or.jp/our-collection/profile-of-works.html?work_id=9738

3

猿わか町よるの景

Night View of Saruwaka-machi

安政3年(1856)9月 / No.107(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 猿わか町よるの景」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Kentin, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

芝居小屋の看板行灯が夜空に浮かび上がる、猿若町の賑わいを描いた一枚。芝居がはねた後の高揚感と、江戸随一の芝居町の熱気が伝わってきます。

最寄り駅: 東京メトロ銀座線 浅草駅から徒歩10分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

猿わか町よるの景

いまの場所

猿若町跡(現・浅草6丁目、浅草演芸ホール周辺)
台東区浅草6丁目

歴史

この町名は、江戸歌舞伎の創始者・猿若勘三郎(初代中村勘三郎、1624年に江戸で最初の芝居小屋を開いた人物)にちなみます。老中・水野忠邦による天保の改革(1841)で風紀を乱すとされた中村座・市村座などの芝居小屋が、まとめてこの地へ強制移転させられ「猿若町」と名付けられました。現在は住宅地ですが、一角には浅草演芸ホールが今も演芸の灯をともし続けています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

浅草花やしき

徒歩5分ほど



嘉永6年(1853)開園、日本最古の遊園地。当初は牡丹や菊細工を楽しむ花園として始まりました。170年以上経った今も現役です。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://gekkan-asakusa.com/asakusa-rokku-geinouden28/2/>

4

浅草金龍山

Kinry ū zan Temple in Asakusa

安政3年(1856)7月 / No.9(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 浅草金龍山」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Tak1701d, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

雷門の大提灯と仁王門、五重塔を画面いっぱいに配し、白と朱の対比で浅草寺の門前を印象的に描いた一枚。広重晩年らしい大胆な構図で、江戸随一の観音霊場の風格を伝えています。

最寄り駅: 東京メトロ銀座線・都営浅草線 浅草駅から徒歩すぐ 滞在目安: 約30分

広重が描いた場所

浅草金龍山

いまの場所

浅草寺・雷門
台東区浅草2-3-1

歴史

浅草寺の始まりは推古天皇36年(628)、隅田川で漁をしていた檜前浜成・竹成の兄弟の網に観音像がかかり、里長の土師中知がこれを祀ったのが起源と伝わります。以来1400年近く「浅草観音」として親しまれ、雷門から本堂まで続く仲見世通りは、日本最古の商店街のひとつに数えられています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

仲見世商店街

雷門から本堂まで徒歩5分

雷門から浅草寺本堂まで続く、日本最古級の商店街。人形焼きや雷おこしなど、食べ歩きのお店が軒を連ねます。



この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://www.nippon.com/ja/guide-to-japan/gu004025/>

5

真乳山山谷堀夜景

Night View of Matsuchiyama and the San'ya Canal

安政4年(1857)8月 / No.112(太田記念美術館リスト番号)



安政期



いま

歌川広重「名所江戸百景 真乳山山谷堀夜景」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by あばさー, Wikimedia Commons(Public Domain)

浮世絵を読み解く

隅田川沿いの小高い丘・待乳山と、そこに注ぐ山谷堀の夜景を描いた一枚。山谷堀は吉原へ舟で向かう客たちの水路としても使われ、川面に映る灯りが夜の情緒を引き立てています。

最寄り駅: 都営浅草線・東武線 浅草駅から徒歩10分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

真乳山山谷堀夜景

いまの場所

待乳山聖天(本龍院)

台東区浅草7-4-1

歴史

待乳山聖天(本龍院)は、推古天皇3年(595)にこの丘が一夜にして湧き出たという伝説を持つお寺です。祀られている歓喜天は夫婦和合や商売繁盛の神様とされ、お供えの大根と、財運を象徴する巾着が名物になっています。かつて舟で行き来した山谷堀は、今では埋め立てられて山谷堀公園という遊歩道になっています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

今戸神社



招き猫発祥の地のひとつとされる神社。狛犬ならぬ一對の招き猫が出迎えてくれます。

徒歩5分ほど

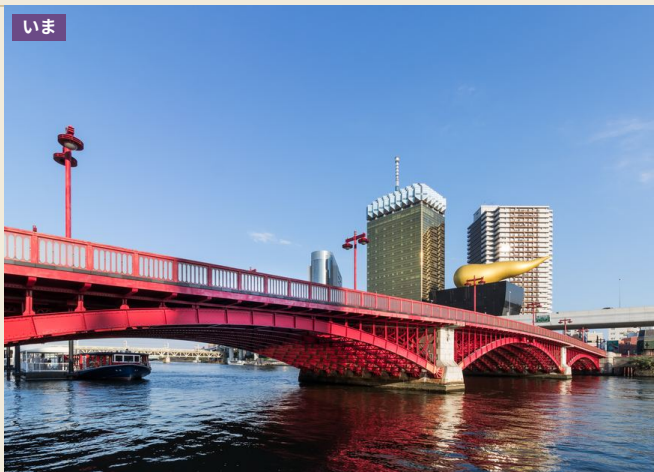
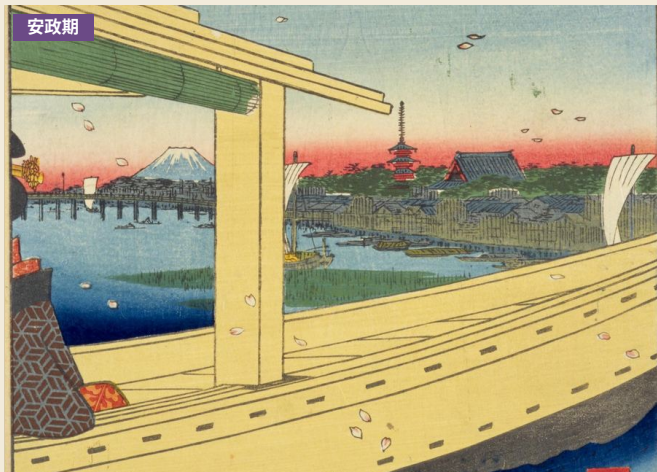
[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://www.nippon.com/ja/guide-to-japan/gu004062/>

6

吾妻橋金龍山遠望

Distant View of Kinryūzan Temple and the Azuma Bridge

安政4年(1857)8月 / No.34(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 吾妻橋金龍山遠望」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Kakidai, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

吾妻橋の上から隅田川越しに浅草寺(金龍山)を遠望する構図。橋を渡る人々の姿とともに、対岸に浮かぶ五重塔が江戸屈指の名所であったことを物語っています。

最寄り駅: 東京メトロ銀座線・都営浅草線 浅草駅から徒歩5分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

吾妻橋金龍山遠望

いまの場所

吾妻橋

台東区花川戸1丁目・墨田区吾妻橋1丁目

歴史

吾妻橋は安永3年(1774)、町人たちの出資によって架けられた橋です。隅田川に公式な橋を架けることに幕府が慎重だった時代、江戸で最後発の大橋としてこの地に生まれ、当時は「大川橋」とも呼ばれていました。現在の橋は昭和6年(1931)に架け替えられたもので、対岸には東京スカイツリーを望むこともできます。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

すみだ公園

橋を渡ってすぐ

隅田川沿いに広がる公園。桜の名所としても知られ、対岸のアサヒビール本社や東京スカイツリーを一望できます。



この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://www.nippon.com/ja/guide-to-japan/gu004110/>

7

浅草川首尾の松御厩河岸

Pine of Success and Oumayagashi

安政3年(1856)8月 / No.111(太田記念美術館リスト番号)



松の跡地の石碑周辺で適切な現地写真が見つからなかったため未掲載です

歌川広重「名所江戸百景 浅草川首尾の松御厩河岸」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

浮世絵を読み解く

御厩河岸のたもとに枝を広げる「首尾の松」越しに、満天の星と隅田川を行き交う舟を描いた一枚。すだれを下ろした屋根舟に人影がうっすらと浮かび、水辺の密やかな逢瀬を思わせる情緒的な構図です。

最寄り駅: 都営浅草線・都営大江戸線 蔵前駅から徒歩8分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

浅草川首尾の松御厩河岸

いまの場所

首尾の松(石碑・復元)
台東区蔵前・隅田川沿い

歴史

「首尾の松」の名は、舟で吉原へ向かう客たちがこの松の下で今宵の首尾(遊びがうまくいくかどうか)を語り合ったことに由来すると伝わります。松のあった御厩河岸は、幕府の米蔵(浅草御蔵)に囲われた倉庫街・蔵前の一角でした。現在は厩橋のたもとに石碑と復元の松が残るのみですが、蔵前は近年、紙や雑貨の店が集まるおしゃれな町として生まれ変わっています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

蔵前神社

徒歩10分ほど



江戸時代、勧進相撲がここでも行われたと伝わる神社。蔵前が「もうひとつの相撲の町」だった記憶を今に伝えます。

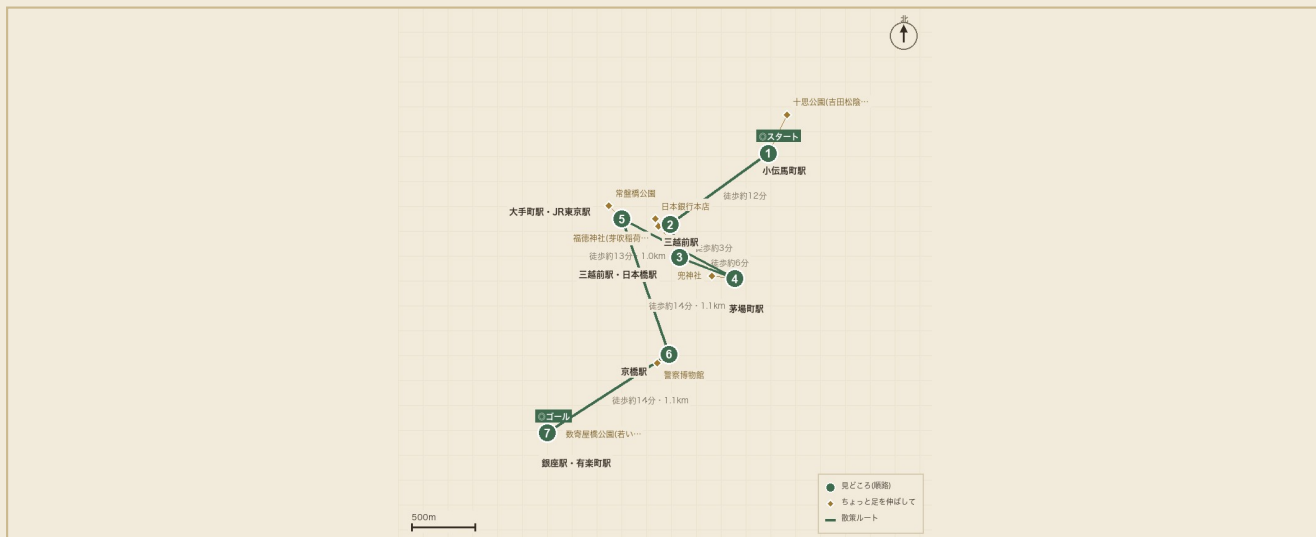
[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://www.nippon.com/ja/guide-to-japan/gu004045/>

日本橋・京橋ルート

中央区

小伝馬町駅から銀座・数寄屋橋まで、日本橋川沿いの老舗と橋の跡をめぐる散歩ルート。



起点: 東京メトロ日比谷線 小伝馬町駅

終点: 東京メトロ銀座線 銀座駅

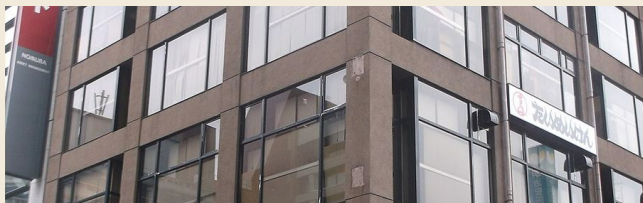
徒歩距離目安: 約3.2km

順路

- ① 大伝馬町こふく店 → 日本橋大伝馬町 (滞在目安 約10分)
- ② する賀てふ → 日本橋室町(三越前) (滞在目安 約15分)
- ③ 日本橋雪晴 → 日本橋 (滞在目安 約15分)
- ④ 鎧の渡し小網町 → 鎧橋(日本橋小網町・兜町) (滞在目安 約10分)
- ⑤ ハツ見のはし → 一石橋 (滞在目安 約10分)
- ⑥ 京橋竹がし → 京橋 (滞在目安 約10分)
- ⑦ びくにはし雪中 → 数寄屋橋交差点 (滞在目安 約10分)

この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →

エリアのグルメ



洋食(オムライス)

たいめいけん

昭和6年(1931)創業の洋食店。名物のオムライスは、初代が考案し二代目が広めた「タンポポオムライス」でも有名。日本橋室町に移転後も味を守り続けています。

中央区日本橋室町1-8-6

適切なライセンスの写真が見つからなかったため未掲載です

だし・鯉節

にんべん 日本橋本店

元禄12年(1699)創業、320年以上続く鯉節・だし専門店。日本橋という地名ができる前からこの地で商いを続けてきた、まさに生き証人のような老舗です。

中央区日本橋室町2-2-1

1

大伝馬町こふく店

Silk-Goods Lane, Odenma-cho

安政5年(1858)7月 / No.59(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 大伝馬町こふく店」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Suikotei, Wikimedia Commons(CC BY 4.0)

浮世絵を読み解く

呉服商・大丸の店先を、木遣りを歌いながら練り歩く鳶職たちの祝賀行列。新築の棟上げを終えた「棟梁送り」の祝いで、大きな纏や梯子を掲げた威勢の良い姿が描かれています。

最寄り駅: 東京メトロ日比谷線 小伝馬町駅から徒歩3分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

大伝馬町こふく店

いまの場所

日本橋大伝馬町
中央区日本橋大伝馬町

歴史

大伝馬町の名は、慶長年間にこの地で幕府の伝馬(公用の馬による飛脚)を差配した名主・馬込勘解由に由来します。以後、木綿や呉服を扱う問屋が軒を連ねる江戸有数の商業地となり、明治以降も繊維卸の街として発展しました。関東大震災と東京大空襲で江戸期の街並みは失われましたが、今も繊維関連の卸商が点在しています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

十思公園(吉田松陰終焉の地)

徒歩5分ほど

江戸時代の伝馬町牢屋敷跡に作られた公園。幕末の思想家・吉田松陰が安政の大獄で処刑された場所として知られ、園内に記念碑が立っています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E4%BC%9D%E9%A6%AC%E7%94%BA>

2

する賀てふ

Suruga-chō

安政3年(1856)9月 / No.53(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 する賀てふ」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Kakidai, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

越後屋(現・三越)の屋根越しに富士山を望む、江戸随一と謳われた眺め。街の名は駿河国(するがのくに)がよく見えることに由来し、両側に大きく描かれた越後屋の暖簾が通りの主役です。

最寄り駅: 東京メトロ銀座線・半蔵門線 三越前駅から徒歩すぐ 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

する賀てふ

いまの場所

日本橋室町(三越前)
中央区日本橋室町1丁目

歴史

越後屋は延宝元年(1673)、三井高利が創業した呉服店。それまでの「掛け売り・訪問販売」が当たり前だった商習慣に対し、「店先現金売り・正札販売(値切り交渉なし)」という革新的な商法を持ち込み、江戸中の評判を呼びました。この越後屋こそが、後の三越百貨店、そして三井財閥のルーツです。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして



福徳神社(芽吹稲荷)

徒歩2分ほど

貞観年間からと伝わる古社。徳川秀忠が参詣した際、鳥居に若芽が芽吹いていたことから「芽吹稲荷」とも呼ばれます。2014年、再開発にあわせて社殿が新しくなりました。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E8%B6%8A>

3

日本橋雪晴

Nihonbashi Bridge: Clearing after Snow

安政3年(1856)5月 / No.1(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 日本橋雪晴」 国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by urbzoo, Wikimedia Commons(CC BY 2.0)

浮世絵を読み解く

百景シリーズの巻頭を飾る一枚。雪晴れの朝、日本橋の向こうに江戸城と富士山を望む構図で、魚河岸へ急ぐ船が行き交う「江戸の台所」の活気ある一日の始まりを描いています。

最寄り駅: 東京メトロ 三越前駅・日本橋駅から徒歩すぐ 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

日本橋雪晴

いまの場所

日本橋

中央区日本橋

歷史

日本橋は慶長8年(1603)、徳川家康が幕府を開いたのと同じ年に架けられました。以後、東海道をはじめ五街道すべての起点「里程元標」と定められ、文字通り日本の道路網の中心地となります。現在の石造りの橋は明治44年(1911)完成のもので、頭上を首都高速道路が覆う姿は1964年東京五輪に向けた突貫工事の名残です。橋の中央には今も「日本国道路元標」が埋め込まれています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

日本銀行本店

徒歩5分ほど

明治29年(1896)竣工、辰野金吾設計のネオバロック様式建築。日本橋川沿いに立つその姿は、江戸の金融の中心地だったこの一帯の記憶を今に伝えます。



浮世絵原画・解説: [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%A9%8B_\(%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD%E4%B8%AD%E5](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%A9%8B_(%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD%E4%B8%AD%E5)

4

鎧の渡し小網町

Yoroi Ferry, Koami-chō

安政4年(1857)10月 / No.28(太田記念美術館リスト番号)



安政期



いま

歌川広重「名所江戸百景 鎧の渡し小網町」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by 妖精書士, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

橋のなかった日本橋川を渡る「鎧の渡し」の渡船場を描いた一枚。手前の小網町には問屋の蔵が建ち並び、荷を積んだ渡し船が対岸の茅場町方面へと行き交っています。

最寄り駅: 東京メトロ東西線・日比谷線 茅場町駅から徒歩5分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

鎧の渡し小網町

いまの場所

鎧橋(日本橋小網町・兜町)

中央区日本橋小網町

歴史

「鎧の渡し」の名は、後三年の役で嵐に遭った源義家が鎧を川に投げ入れて水を鎮めたという伝説に由来すると伝わります。渡し船は明治5年(1872)、日本初期の西洋式鉄橋のひとつ「鎧橋」に架け替えられ、渡し場としての役目を終えました。現在の橋は昭和32年(1957)の架け替えで、すぐそばの兜町は東京証券取引所を擁する日本の金融の中心地として発展しています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

兜神社

徒歩5分ほど



東京証券取引所のすぐそばに鎮座する、証券界の守護神。かつて源義家が兜を埋めたという「兜岩」の伝説にちなむ神社で、商売繁盛を願う参拝者が絶えません。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%8E%A7%E6%A9%8B>

5

八ツ見のはし

Yatsumibashi Bridge

安政3年(1856)8月 / No.4(太田記念美術館リスト番号)



安政期



いま

歌川広重「名所江戸百景 八ツ見のはし」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Katorisi, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

一石橋の上から見渡すと、外堀の呉服橋・鍛冶橋、道三堀の銭瓶橋・道三橋、そして北に常盤橋、西に日本橋、東に江戸橋と、一度に8つの橋が見えたことから「八ツ見のはし」と呼ばれました。

最寄り駅: 東京メトロ 大手町駅・JR東京駅から徒歩5分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

八ツ見のはし

いまの場所

一石橋

中央区八重洲1丁目・日本橋本石町1丁目

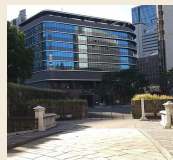
歴史

橋の名「一石橋」は洒落から来ています。橋の兩岸にそれぞれ屋敷を構えていた後藤庄三郎(金座)と後藤対馬守という、共に「後藤」姓の人物が費用を出し合って架けたことから、「五斗+五斗=一石」の語呂合わせで名付けられたと伝わります。現在の橋は大正11年(1922)築。橋詰には安政4年(1857)建立の「迷子しらせ石標」が今も残り、迷子を探す親が貼る紙をした江戸の掲示板として使われていました。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

常盤橋公園

徒歩3分ほど



日本橋川に架かる常盤橋門跡と、渋沢栄一の銅像がある公園。江戸城外堀の枳形門の石垣が今も残り、江戸時代の面影を伝える貴重な史跡です。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%80%E7%9F%B3%E6%A9%8B>

6

京橋竹がし

Bamboo Yards, Kyō bashi Bridge

安政4年(1857)12月 / No.114(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 京橋竹がし」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Aimaimyi, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

京橋のもと、竹河岸に積み上げられた大量の竹材を月明かりが照らす一枚。江戸中の建材や生活用品に使われた竹を扱う問屋が並び、水運の要所として賑わっていました。

最寄り駅: 東京メトロ銀座線 京橋駅から徒歩 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

京橋竹がし

いまの場所

京橋

中央区京橋

歴史

京橋は慶長8年(1603)、日本橋の翌年に架けられた橋で、東海道を京都・上方へ向かう最初の橋であったことからこの名がつけました。橋が架かっていた京橋川は昭和34年(1959)に埋め立てられて姿を消し、橋自体も撤去されましたが、橋詰には明治8年(1875)建造の親柱(橋の欄干の柱)が今も保存されています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

警察博物館

徒歩3分ほど

警視庁の歴史や活動を紹介する博物館。パトカーやヘリコプターの実物展示もあり、子供から大人まで楽しめる無料スポットです。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%AC%E6%A9%8B_\(%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%AC%E6%A9%8B_(%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD))

7

びくにはし雪中

Bikuni Bridge in Snow

安政5年(1858)10月 / No.78(太田記念美術館リスト番号)



安政期



いま

歌川広重「名所江戸百景 びくにはし雪中」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Souka Kinmei, Wikimedia Commons(CC BY 4.0)

浮世絵を読み解く

外堀に架かるびくにはし(比丘尼橋)のたもと、雪の中で商う屋台を描いた一枚。「山くじら」の看板(猪肉を婉曲に表す隠語)が見え、殺生を憚りながらも肉食を楽しんだ江戸っ子の姿がうかがえます。

最寄り駅: 東京メトロ 銀座駅・有楽町駅から徒歩 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

びくにはし雪中

いまの場所

数寄屋橋交差点
中央区銀座5丁目

歴史

びくにはしは外堀に架かっていた橋で、名の由来は付近に「比丘尼(尼僧姿の私娼)」を置く水茶屋があったためと伝わります。外堀は昭和になって埋め立てられ、橋も姿を消しましたが、すぐそばにあった数寄屋橋の名だけが交差点名として残り、現在は銀座を代表する待ち合わせスポットのひとつになっています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

数寄屋橋公園(若い時計台)

徒歩1分ほど



岡本太郎作の彫刻「若い時計台」が立つ小さな公園。数寄屋橋ライオンズクラブから中央区へ寄贈されたもので、夜はライトアップされます。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%95%B0%E5%AF%84%E5%B1%8B%E6%A9%8B>

上野・谷中・根岸ルート

台東区・文京区・荒川区

上野公園から谷中・西日暮里まで、寛永寺の山内と寺町・坂道をめぐる散歩ルート。



起点: JR 上野駅

終点: JR 西日暮里駅

徒歩距離目安: 約3.5km

順路

- ① 上野清水堂不忍ノ池 → 清水観音堂・不忍池 (滞在目安 約20分)
- ② 上野山内月のまつ → 清水観音堂の「月の松」 (滞在目安 約10分)
- ③ 下谷広小路 → アメヤ横丁(アメ横)周辺 (滞在目安 約20分)
- ④ 湯しま天神坂上眺望 → 湯島天満宮(湯島天神) (滞在目安 約15分)
- ⑤ 千駄木団子坂花屋敷 → 団子坂 (滞在目安 約10分)
- ⑥ 日暮里寺院の林泉 → 谷中・修性院周辺 (滞在目安 約15分)
- ⑦ 日暮里諏訪の台 → 諏方神社周辺の高台 (滞在目安 約15分)

この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →

エリアのグルメ



洋食

上野精養軒

明治5年(1872)創業、日本の西洋料理店の草分け。夏目漱石や森鷗外の作品にも登場する老舗で、上野公園の中に今も店を構えています。

台東区上野公園4-58

適切なライセンスの写真が見つからなかったため未掲載です

そば

蓮玉庵

安政年間(1854-1860)創業と伝わる、上野広小路の老舗そば屋。名所江戸百景が描かれたのとほぼ同じ時代からこの地で商いを続けています。

台東区上野2-8-7

1

上野清水堂不忍ノ池

Kiyomizu Hall and Shinobazu Pond at Ueno

安政3年(1856)4月 / No.19(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 上野清水堂不忍ノ池」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Guilhem Vellut, Wikimedia Commons(CC BY 2.0)

浮世絵を読み解く

京都・清水寺を模して建てられた清水観音堂の舞台から、不忍池と弁天堂を見下ろす構図。舞台の柱越しに池を望むという、実際の清水寺の「舞台造り」を彷彿とさせる仕掛けが凝らされています。

最寄り駅: JR・東京メトロ 上野駅から徒歩5分 滞在目安: 約20分

広重が描いた場所

上野清水堂不忍ノ池

いまの場所

清水観音堂・不忍池
台東区上野公園1-29

歴史

清水観音堂は寛永8年(1631)、寛永寺の開山・天海が「江戸の人々にも京都の清水寺参りの気分を味わってほしい」と、あえて本家そっくりに建てたお堂です。慶応4年(1868)の上野戦争(彰義隊の戦い)や第二次大戦の空襲では寛永寺の大半が焼失しましたが、この観音堂は奇跡的に焼け残り、上野公園に現存する江戸期建築のひとつとなっています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

上野大仏(顔だけ大仏)

徒歩3分ほど



度重なる地震と火災で身体を失い、今では顔の部分だけが残る大仏様。「これ以上落ちない」ということから、受験合格祈願の名所になっています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B8%85%E6%B0%B4%E8%A6%B3%E9%9F%B3%E5%A0%82_\(%E5%AF%9B%E6%B0%B8%E5%\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B8%85%E6%B0%B4%E8%A6%B3%E9%9F%B3%E5%A0%82_(%E5%AF%9B%E6%B0%B8%E5%))

2

上野山内月のまつ

Moon Pine, Ueno

安政4年(1857)8月 / No.36(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 上野山内月のまつ」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Tak1701d, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

枝を丸く仕立てた「月の松」の輪の中に、不忍池と満月のような構図をおさめた奇抜な一枚。円形の枝越しに景色を切り取るという斬新なアイデアで、広重晩年の遊び心がよく表れています。

最寄り駅: JR・東京メトロ 上野駅から徒歩5分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

上野山内月のまつ

いまの場所

清水観音堂の「月の松」
台東区上野公園1-29

歴史

この月の松、実は明治初期に枯れてしまい、長らく失われていました。しかし平成24年(2012)、清水観音堂の境内にこの浮世絵をもとにして「月の松」が復元され、今では広重が描いた構図とほぼ同じ景色を実際に見ることができます。浮世絵が現実の景観を「作り直させた」珍しい例といえます。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

上野東照宮

徒歩5分ほど



徳川家康を祀る神社で、金色殿と呼ばれる絢爛豪華な社殿が有名。江戸初期の建築がほぼそのままの姿で残る、上野公園でも屈指の見どころです。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: https://www.tesshow.jp/taito/temple_uenokoen_kiyomizu.html

3

下谷広小路

Shitaya Hirokōji

安政3年(1856)9月 / No.60(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 下谷広小路」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Angus Chan, Wikimedia Commons(CC BY-SA 2.5)

浮世絵を読み解く

寛永寺の総門前に広がる、江戸有数の広い通り「下谷広小路」を描いた一枚。両側に呉服店や小間物屋が軒を連ね、大勢の人々が行き交う様子から当時の賑わいが伝わってきます。

最寄り駅: JR 上野駅・御徒町駅から徒歩 滞在目安: 約20分

広重が描いた場所

下谷広小路

いまの場所

アメヤ横丁(アメ横)周辺

台東区上野4-7-8付近

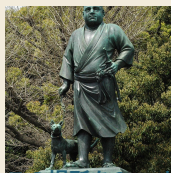
歴史

「広小路」という名の通り、この通りは明暦の大火(1657)という江戸史上最大の大火の教訓から、防火のためにわざと広く作られました。現在この界隈は、戦後の闇市を起源に持つ「アメ横」として生まれ変わり、乾物や衣料品の露店がひしめく庶民的な商店街として、当時とは違う形の賑わいを今に伝えています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

西郷隆盛像

徒歩5分ほど



上野公園の入り口に立つ、犬を連れた着物姿の銅像。明治31年(1898)除幕、彫刻家・高村光雲の作で、上野のシンボリック的存在として親しまれています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%A4%E6%A8%AA%E4%B8%81>

4

湯しま天神坂上眺望

Hilltop View, Yushima Tenjin Shrine

安政3年(1856)4月 / No.17(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 湯しま天神坂上眺望」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Dennis Boller, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

湯島天神の男坂・女坂を上りきった高台から、不忍池方面を見晴らす構図。坂の上という高低差を生かして、江戸の町並みを一望する開放感を表現しています。

最寄り駅: 東京メトロ千代田線 湯島駅から徒歩5分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

湯しま天神坂上眺望

いまの場所

湯島天満宮(湯島天神)

文京区湯島3-30-1

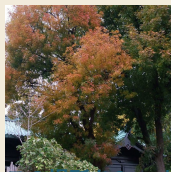
歴史

湯島天神は雄略天皇2年(458)創建と伝わる古社で、祭神は学問の神様・菅原道真(亀戸天神と同じ祭神です)。受験シーズンには合格祈願の絵馬で境内が埋め尽くされる、東京有数の学問成就スポットとして今も多くの参拝者を集めています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

湯島聖堂

徒歩10分ほど



徳川綱吉が元禄3年(1690)に建てた孔子廟。日本の学校教育発祥の地ともいわれ、現在の建物は関東大震災後に鉄筋コンクリートで再建されたものです。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B9%AF%E5%B3%B6%E5%A4%A9%E6%BA%80%E5%AE%AE>

5

千駄木団子坂花屋敷

Flower Pavilion, Dangozaka Slope, Sendagi

安政3年(1856)5月 / No.65(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 千駄木団子坂花屋敷」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Higa4, Wikimedia Commons(CC0)

浮世絵を読み解く

団子坂の途中にあった花屋敷(植木屋)を描いた一枚。坂の上からは花見客で賑わう庭園を見下ろし、坂の下からは見上げる構図で、高低差のある地形を活かした遠近感が印象的です。

最寄り駅: 東京メトロ千代田線 千駄木駅から徒歩 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

千駄木団子坂花屋敷

いまの場所

団子坂

文京区千駄木2丁目・3丁目の間

歴史

坂の名の由来は諸説あり、団子屋が並んでいたから、あるいは坂の形が団子のようなことからとも言われます。江戸から明治にかけては菊人形の見世物で全国的に有名になり、夏目漱石の小説「三四郎」にも団子坂の菊人形見物の場面が登場します。花屋敷は今はなく、静かな住宅地の坂道になっています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

根津神社

徒歩10分ほど



1900年以上の歴史を持つと伝わる古社で、現在の社殿は宝永3年(1706)、5代将軍・徳川綱吉が奉建したもの。江戸期の権現造り社殿がほぼそのまま残る貴重な神社です。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

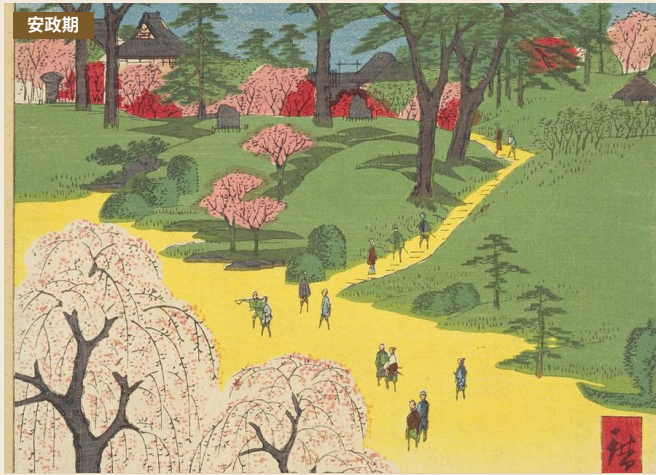
浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%A3%E5%AD%90%E5%9D%82>

6

日暮里寺院の林泉

Temple Gardens, Nippori

安政4年(1857)2月 / No.106(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 日暮里寺院の林泉」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Multa, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

日暮里の寺院に作られた庭園の池泉を描いた一枚。手前に大きく枝垂れ桜、奥に築山と池という構図で、都心とは思えない静かな行楽地としての日暮里の魅力を伝えています。

最寄り駅: JR 日暮里駅から徒歩7分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

日暮里寺院の林泉

いまの場所

谷中・修性院周辺

荒川区西日暮里3丁目付近

歴史

「日暮里」という地名は、もとは「新堀(にっぽり)」と書かれていましたが、一日中いても飽きない里という意味を込めて「日暮らしの里」の字が当てられるようになったといわれます。江戸時代から寺と庭園が集まる行楽地として知られ、関東大震災や東京大空襲の被害も比較的少なかったため、今も谷中には数多くの寺院と、独特の下町情緒が残っています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

経王寺

徒歩5分ほど



明暦元年(1655)開山の日蓮宗寺院。慶応4年(1868)の上野戦争で敗走した彰義隊の一部をかくまったとされ、山門には今も戦いの弾痕が残っていると伝わります。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B0%B7%E4%B8%AD>

7

日暮里諏訪の台

Suwa Bluff, Nippori

安政3年(1856)5月 / No.95(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 日暮里諏訪の台」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Abasaa, Wikimedia Commons(Public Domain)

浮世絵を読み解く

諏訪の台にあった茶屋からの眺めを描いた一枚。高台から田んぼ越しに富士山と筑波山を望む構図で、行楽客がくつろぐ様子とともに、江戸近郊ののどかな眺望が表現されています。

最寄り駅: JR・東京メトロ 西日暮里駅から徒歩3分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

日暮里諏訪の台

いまの場所

諏方神社周辺の高台

荒川区西日暮里3-4-8

歴史

諏訪の台の名は、鎌倉時代創建と伝わる諏方神社に由来します。日暮里・谷中一带の総鎮守として今も地域に親しまれるこの神社の立つ高台は、今ではすぐ下を走るJRの線路を見渡せる、鉄道ファンに人気の「ふれあい橋」からの眺めにその面影を残しています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

谷中銀座・タヤけだんだん

徒歩10分ほど

谷中霊園の南側に広がる昭和レトロな商店街と、その入口の階段。夕日の名所として知られ、猫の町としても有名な谷根千散歩の定番スポットです。

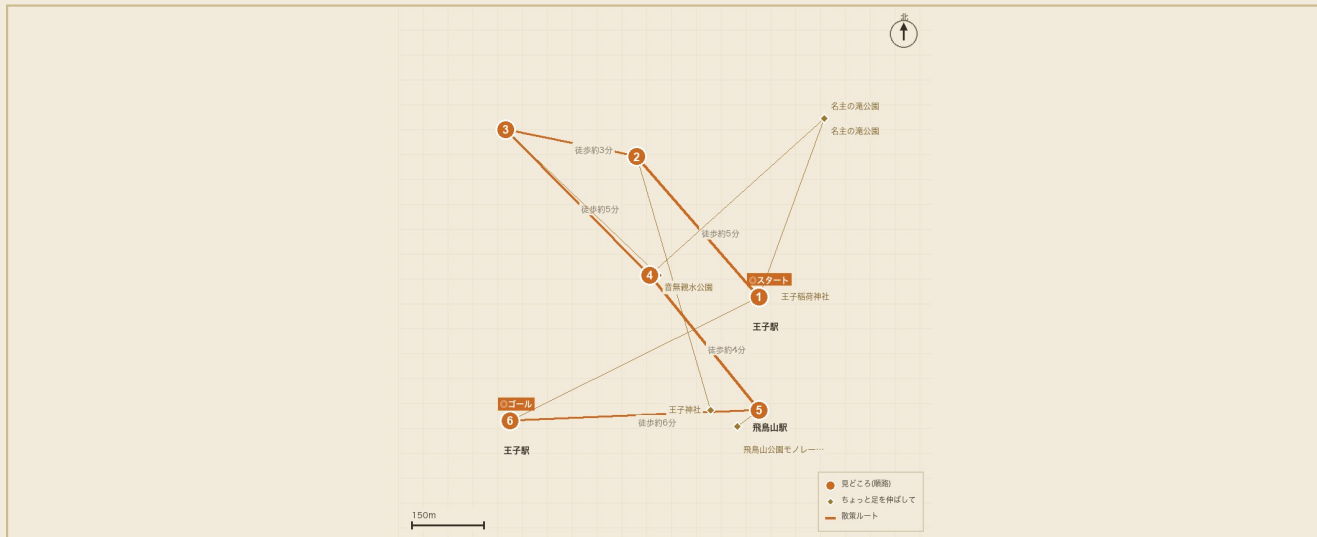
[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%AB%8F%E6%96%B9%E7%A5%9E%E7%A4%BE_\(%E8%8D%92%E5%B7%9D%E5%8C%BA\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%AB%8F%E6%96%B9%E7%A5%9E%E7%A4%BE_(%E8%8D%92%E5%B7%9D%E5%8C%BA))

王子・飛鳥山ルート

北区

王子駅から飛鳥山公園まで、溪谷・滝・稲荷社をめぐる散歩ルート。



起点: JR京浜東北線・東京メトロ南北線 王子駅

終点: 都電荒川線 飛鳥山駅

徒步距離目安: 約2.8km

順路

- ① 王子稻荷の社 → 王子稻荷神社 (滞在目安 約15分)
- ② 王子瀧の川 → 石神井川(音無川)溪谷 (滞在目安 約15分)
- ③ 王子不動之瀧 → 金剛寺(滝野川不動) (滞在目安 約10分)
- ④ 王子音無川堰埭世俗大瀧ト唱 → 音無親水公園の堰跡 (滞在目安 約15分)
- ⑤ 飛鳥山北の眺望 → 飛鳥山公園 (滞在目安 約20分)
- ⑥ 王子装束系の木大晦日の狐火 → 装束稲荷神社 (滞在目安 約10分)

この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →

エリアのグルメ

適切なライセンスの写真が見つからなかったため未掲載です

厚焼き玉子

王子 扇屋

慶安元年(1648)創業、370年以上続く老舗。落語「王子の狐」の舞台としても知られ、秘伝のだしで仕立てた甘い厚焼き玉子が名物です。

北区岸町1-1-7

1

王子稲荷の社

Ōji Inari Shrine

安政4年(1857) / No.12(太田記念美術館リスト番号)



安政期



いま

歌川広重「名所江戸百景 王子稲荷の社」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Tak1701d, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

崖の斜面に沿って続く石段と、その上に鎮座する社殿を描いた一枚。関東稲荷総司という格式にふさわしい、荘厳な佇まいが表現されています。

最寄り駅: JR・東京メトロ 王子駅から徒歩5分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

王子稲荷の社

いまの場所

王子稲荷神社

北区岸町1-12-26

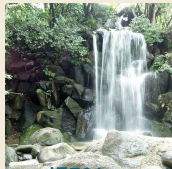
歴史

王子稲荷神社は、関東一円のお稲荷様を束ねる「関東稲荷総司」という別格の社格を持つ古社です。大晦日の夜、関東中の狐たちがこの近くの装束榎で身なりを整えてから稲荷に参詣したという伝説があり、その様子は広重の別の一枚「王子装束糸の木大晦日の狐火」にも描かれています。現在も大晦日には、この伝説にちなんだ「狐の行列」が地域の行事として行われています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

名主の滝公園

徒歩10分ほど



かつて「王子七滝」と呼ばれた滝のうち、唯一現存する滝がある公園。江戸時代に名主が屋敷内に開いた庭園がルーツで、都会とは思えない渓谷美が楽しめます。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8E%8B%E5%AD%90%E7%A8%B2%E8%8D%B7%E7%A5%9E%E7%A4%BE>

2

王子瀧の川

Takinogawa, Ōji

安政3年(1856)4月 / No.15(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 王子瀧の川」 国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Souka Kinmei, Wikimedia Commons(CC0)

浮世絵を読み解く

石神井川(別名・滝野川)が刻む溪谷を描いた一枚。飛鳥山のふもとを流れるこの川は急流で、不動の滝や弁天の滝など大小の滝があり、江戸有数の景勝地として知られていました。

最寄り駅: JR・東京メトロ 王子駅から徒歩5分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

王子瀧の川

いまの場所

石神井川(音無川)溪谷
北区王子本町・滝野川エリア

歴史

「滝野川」という地名は、この川に多くの滝があったことに由来します。江戸時代、王子を訪れた人々はこの溪谷沿いを歩いて滝めぐりを楽しみました。現在の石神井川はコンクリート護岸の都市河川となっていますが、王子駅周辺の一部区間は「音無親水公園」として整備され、せせらぎの音が聞こえる憩いの場になっています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

王子神社

徒歩5分ほど



鎌倉時代創建と伝わる古社で、「王子」という地名の由来そのものになった神社。石神井川を見下ろす高台に鎮座し、境内には推定樹齢600年の大イチョウがあります。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

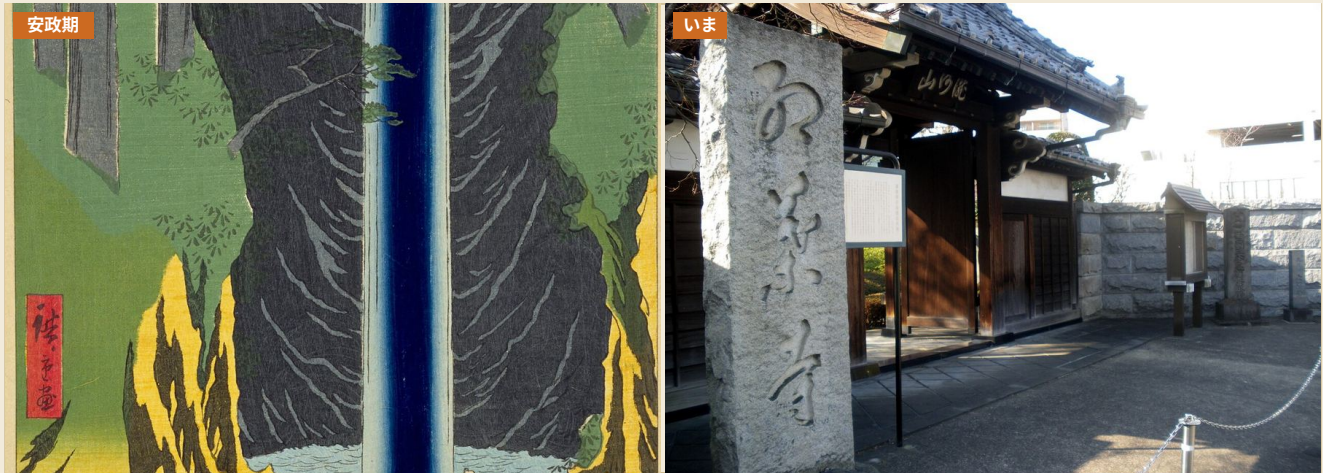
浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9F%B3%E7%A5%9E%E4%BA%95%E5%B7%9D>

3

王子不動之瀧

Fudō Falls, Ōji

安政4年(1857)9月 / No.51(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 王子不動之瀧」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Kamemaru2000, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

金剛寺の境内にあった不動の滝で、滝行をする人々を描いた一枚。「王子七滝」の中でも特に信仰を集めた滝で、断崖から流れ落ちる水の勢いが印象的に表現されています。

最寄り駅: JR・東京メトロ 王子駅から徒歩10分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

王子不動之瀧

いまの場所

金剛寺(滝野川不動)

北区滝野川3-88-17

歴史

金剛寺は「岩屋弁天」「松橋弁天」とも呼ばれる古刹で、崖下の洞窟に弁財天を祀っていたと伝わります。源頼朝が布陣したという伝承も残る由緒あるお寺です。境内の不動の滝は湧水量の減少により失われましたが、寺自体は今も滝野川の地に残り、紅葉の名所としても知られています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

音無親水公園

徒歩5分ほど



石神井川の旧流路を利用して作られた親水公園。せせらぎや小さな滝、木の橋があり、かつての「音無溪谷」の雰囲気をも今に伝える憩いのスポットです。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%91%E5%89%9B%E5%AF%BA_\(%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD%E5%8C%97%E5%\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%91%E5%89%9B%E5%AF%BA_(%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD%E5%8C%97%E5%))

4

王子音無川堰埭世俗大瀧ト唱

Dam on the Otonashi River at Ōji

安政4年(1857)2月 / No.102(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 王子音無川堰埭世俗大瀧ト唱」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Souka Kinmei, Wikimedia Commons(CC0)

浮世絵を読み解く

石神井川に設けられた堰を、地元の人々が「王子の大滝」と呼んで親しんだ様子を描いた一枚。実際の落差はさほどないものの、誇張気味に「大瀧」と呼ばれるほどの人気ぶりが伝わってきます。

最寄り駅: JR・東京メトロ 王子駅から徒歩 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

王子音無川堰埭世俗大瀧ト唱

いまの場所

音無親水公園の堰跡
北区王子本町1丁目

歴史

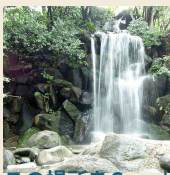
この堰は明暦3年(1657)、下流の田畑を潤す用水を確保するために作られた治水施設でした。飛鳥山の桜と合わせて花見客で賑わったこの一帯は、昭和63年(1988)に「音無親水公園」として整備され、「日本の都市公園100選」にも選ばれる憩いの場になっています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

名主の滝公園

徒歩10分ほど

音無溪谷とともに「王子の滝めぐり」を彩った公園。江戸時代の名主・畑野孫八が屋敷内に開いた庭園がルーツで、今も四つの滝が楽しめます。



[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9F%B3%E7%84%A1%E8%A6%AA%E6%B0%B4%E5%85%AC%E5%9C%92>

5

飛鳥山北の眺望

View to the North from Asukayama

安政3年(1856)5月 / No.20(太田記念美術館リスト番号)



安政期



いま

歌川広重「名所江戸百景 飛鳥山北の眺望」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by (WT-shared) Shoestring, Wikimedia Commons(CC BY-SA 1.0)

浮世絵を読み解く

飛鳥山の高台から、北方に広がる田園風景と筑波山を望む一枚。手前には満開の桜が描かれ、江戸随一の桜の名所であった飛鳥山の華やかさを伝えています。

最寄り駅: 都電荒川線 飛鳥山駅から徒歩 滞在目安: 約20分

広重が描いた場所

飛鳥山北の眺望

いまの場所

飛鳥山公園

北区王子1-1-3

歴史

飛鳥山を桜の名所にしたのは8代将軍・徳川吉宗です。享保の改革の一環として庶民の行楽地を増やす目的で、1000本以上の桜を植えさせました。それまで庶民が自由に立ち入れる花見の名所は少なかったため、この飛鳥山は「誰でも楽しめる公園」の先駆けとも言えます。明治6年(1873)には日本初の公園のひとつに指定され、現在も都内屈指の桜の名所として親しまれています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

飛鳥山公園モノレール「アスカルゴ」

園内すぐ

飛鳥山の急な坂を上る、無料で乗れるミニモノレール。桜の時期はもちろん、園内には渋沢栄一ゆかりの資料館も点在し、家族連れにも人気のスポットです。



この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A3%9B%E9%B3%A5%E5%B1%B1%E5%85%AC%E5%9C%92>

6

王子装束ゑの木大晦日の狐火

New Year's Eve Foxfires at the Changing Tree, Ōji

安政4年(1857)9月 / No.119(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 王子装束ゑの木大晦日の狐火」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Carbonium, Wikimedia Commons(CC BY 3.0)

浮世絵を読み解く

大晦日の夜、関東中から集まった狐たちが装束榎の下で身なりを整え、狐火を灯しながら王子稲荷へ向かう幻想的な伝説を描いた一枚。夜空をきらめかせる「雲母摺」という特殊な技法が使われた、シリーズ最後を飾るにふさわしい一枚です。

最寄り駅: JR・東京メトロ 王子駅から徒歩7分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

王子装束ゑの木大晦日の狐火

いまの場所

装束稲荷神社
北区王子2-30-14

歴史

この伝説にちなみ、榎のあった場所には装束稲荷神社が建てられました。かつての大きな榎は失われましたが、今も大晦日には地元の人々が白い狐の面をつけて装束稲荷から王子稲荷まで練り歩く「王子狐の行列」が現代の年越し行事として親しまれています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

王子稲荷神社

徒歩10分ほど

狐の行列のゴール地点。関東稲荷総司の格式を持つ古社で、大晦日にはこの装束稲荷から狐に扮した人々の行列が到着します。



[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A3%85%E6%9D%9F%E7%A8%B2%E8%8D%B7%E7%A5%9E%E7%A4%BE>

品川・高輪ルート

港区・品川区

神谷町駅から鮫洲駅まで、愛宕山・増上寺・高輪大木戸・品川宿をめぐる散歩ルート。



起点: 東京メトロ日比谷線 神谷町駅

終点: 京急本線 鮫洲駅

徒歩距離目安: 約5.5km

順路

- ① 芝愛宕山 → 愛宕神社 (滞在目安 約20分)
- ② 増上寺塔赤羽根 → 増上寺 (滞在目安 約20分)
- ③ 金杉橋芝浦 → 金杉橋 (滞在目安 約10分)
- ④ 高輪うしまち → 高輪大木戸跡 (滞在目安 約10分)
- ⑤ 品川すさき → 利田神社 (滞在目安 約10分)
- ⑥ 南品川鮫洲海岸 → 鮫洲(品川宿南端) (滞在目安 約10分)

[この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →](#)

エリアのグルメ

適切なライセンスの写真が見つからなかったため未掲載です

そば会席

立会川 吉田家

安政3年(1856)創業、名所江戸百景が描かれたのとまさに同じ時代から続く老舗そば店。坂本龍馬や山岡鉄舟も通ったと伝わります。

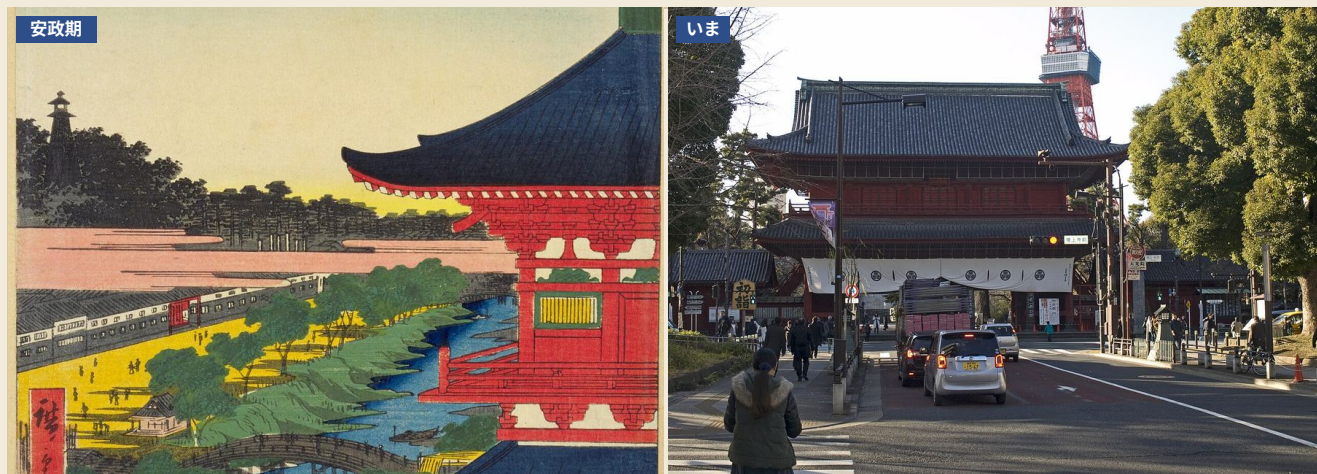
品川区東大井2-27-4

2

増上寺塔赤羽根

Zōjōji Pagoda and Akabane

安政4年(1857)正月 / No.48(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 増上寺塔赤羽根」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Ymblanter, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

遠くに望む増上寺の朱塗りの五重塔と、手前の赤羽根橋を描いた一枚。塔の上部二層だけを大きく切り取る構図で、江戸のランドマークとしての存在感を伝えています。

最寄り駅: 都営三田線 御成門駅・大門駅から徒歩5分 滞在目安: 約20分

広重が描いた場所

増上寺塔赤羽根

いまの場所

増上寺

港区芝公園4-7-35

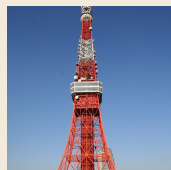
歴史

増上寺は徳川將軍家の菩提寺で、境内には歴代將軍6人の靈廟がありました。広重が描いた五重塔は東京大空襲で焼失しましたが、寛永10年(1633)建立の三解脱門(山門)は戦火を免れ、都内最古級の木造建築として今も現役です。すぐ隣には昭和33年(1958)完成の東京タワーがそびえ、新旧のランドマークが並び立つ景観になっています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

東京タワー

徒歩5分ほど



増上寺のすぐ隣にそびえる、高さ333mの電波塔。建設には朝鮮戦争で使われた米軍戦車のスクラップ鉄も使われたと伝わります。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A2%97%E4%B8%8A%E5%AF%BA>

3

金杉橋芝浦

Kanasugibashi Bridge and Shibaura

安政4年(1857)8月 / No.47(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 金杉橋芝浦」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Abasaa, Wikimedia Commons(Public Domain)

浮世絵を読み解く

東海道が古川の河口を渡る金杉橋を、白装束の参詣者たちが行き交う様子とともに描いた一枚。橋の向こうには芝浦の干潟と江戸湾が広がっています。

最寄り駅: 都営浅草線・三田線 大門駅から徒歩5分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

金杉橋芝浦

いまの場所

金杉橋

港区芝1丁目・浜松町2丁目

歴史

かつての芝浦は、海苔や貝類が豊富に採れる遠浅の干潟でした。江戸前の海苔養殖の一大産地として栄えましたが、20世紀の埋め立てにより海岸線は大きく後退し、現在ではビル群が立ち並ぶオフィス街に姿を変えています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

芝大神宮

徒歩10分ほど

寛弘2年(1005)創建と伝わる古社。「関東のお伊勢さま」として親しまれ、江戸時代には「だらだら祭り」と呼ばれる長期間の例大祭で賑わいました。



この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8A%9D%E6%B5%A6>

4

高輪うしまち

Ushimachi, Takanawa

安政4年(1857)4月 / No.63(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 高輪うしまち」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by 江戸村のとくそう, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

巨大な牛車の車輪を画面いっぱいに配した大胆な構図。高輪大木戸の外に広がる「牛町」の光景を、虹のかかる江戸湾を背景に描いています。

最寄り駅: JR高輪ゲートウェイ駅・都営浅草線 泉岳寺駅から徒歩5分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

高輪うしまち

いまの場所

高輪大木戸跡
港区高輪3-14付近

歴史

「牛町」の名は、寛永16年(1639)、増上寺などの建設資材を運ぶための牛がこの地に集められ、牛方(牛の御者)たちの集落ができたことに由来します。すぐそばの高輪大木戸は宝永7年(1710)、東海道から江戸市中への出入りを取り締まるために設けられた関所でした。現在は土塁の一部だけが国史跡として残り、JRの高架と道路に挟まれた小さな緑地になっています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

泉岳寺

徒歩10分ほど

赤穂浪士47人の墓所があることで知られる曹洞宗の寺院。主君・浅野内匠頭の仇討ちを果たした四十七士は、本懐を遂げた後この寺の主君の墓前に集結しました。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E8%BC%AA%E5%A4%A7%E6%9C%A8%E6%88%B8%E8%B7%A1>

5

品川すさき

Shinagawa Susaki

安政3年(1856)4月 / No.69(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 品川すさき」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Suikotei, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

目黒川の河口に突き出た砂洲「洲崎」に鎮座する小さな弁天社を、松林と朱色の鳥居とともに描いた一枚。江戸湾の穏やかな漁村風景が広がります。

最寄り駅: 京急本線 北品川駅から徒歩7分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

品川すさき

いまの場所

利田神社

品川区東品川1-7-17

歴史

この弁天社(現・利田神社)は、寛政10年(1798)に品川沖に迷い込んだ鯨を捕獲した際、その骨を祀った「鯨塚」があることで知られています。当時この珍事は江戸中の評判となり、時の将軍・徳川家斉も見物に訪れたと伝わります。埋め立てが進んだ現在、神社は海から離れた住宅地の中に佇んでいます。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

品川神社

徒歩10分ほど



文治3年(1187)創建と伝わる、東海道品川宿の総鎮守。境内の富士塚に登れば、品川富士と呼ばれるミニチュアの富士登山が楽しめます。

この場所をGoogleマップで見る →

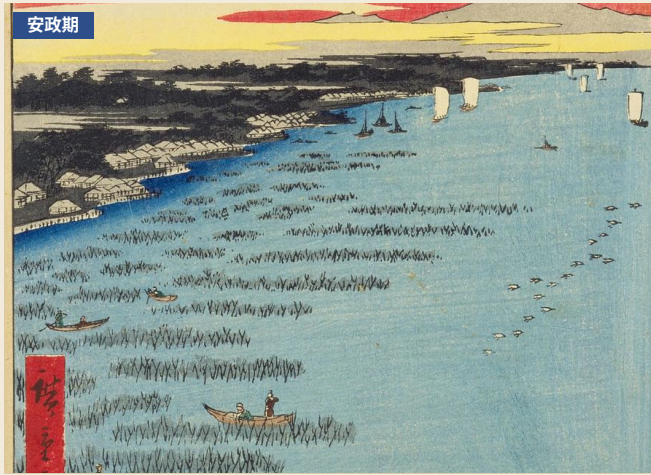
浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%88%A9%E7%94%B0%E7%A5%9E%E7%A4%BE>

6

南品川鮫洲海岸

Minami Shinagawa and Samezu Coast

安政4年(1857)2月 / No.104(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 南品川鮫洲海岸」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by Aimaimyi, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

浅瀬に立てた枝に育てた海苔を摘む女性たちの舟を描いた一枚。遠くに筑波山を望む、のどかな海辺の漁村風景が広がっています。

最寄り駅: 京急本線 鮫洲駅から徒歩 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

南品川鮫洲海岸

いまの場所

鮫洲(品川宿南端)

品川区東大井1丁目付近

歴史

「鮫洲」の名は、この浦でかつて鮫が捕らえられたという伝説に由来すると言われます。この一帯は東海道五十三次の第一宿・品川宿の南端にあたり、江戸随一の賑わいを見せた宿場町でした。海岸線は埋め立てで大きく後退しましたが、旧東海道の道筋は今も品川区内に細い通りとして残り、ところどころに海鼠壁の土蔵など往時の面影を伝える建物が残っています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

鈴ヶ森刑場跡

徒歩15分ほど



慶安4年(1651)に設置された江戸時代の処刑場跡。由井正雪の乱の関係者や八百屋お七など、歴史上有名な人物もここで処刑されたと伝わります。

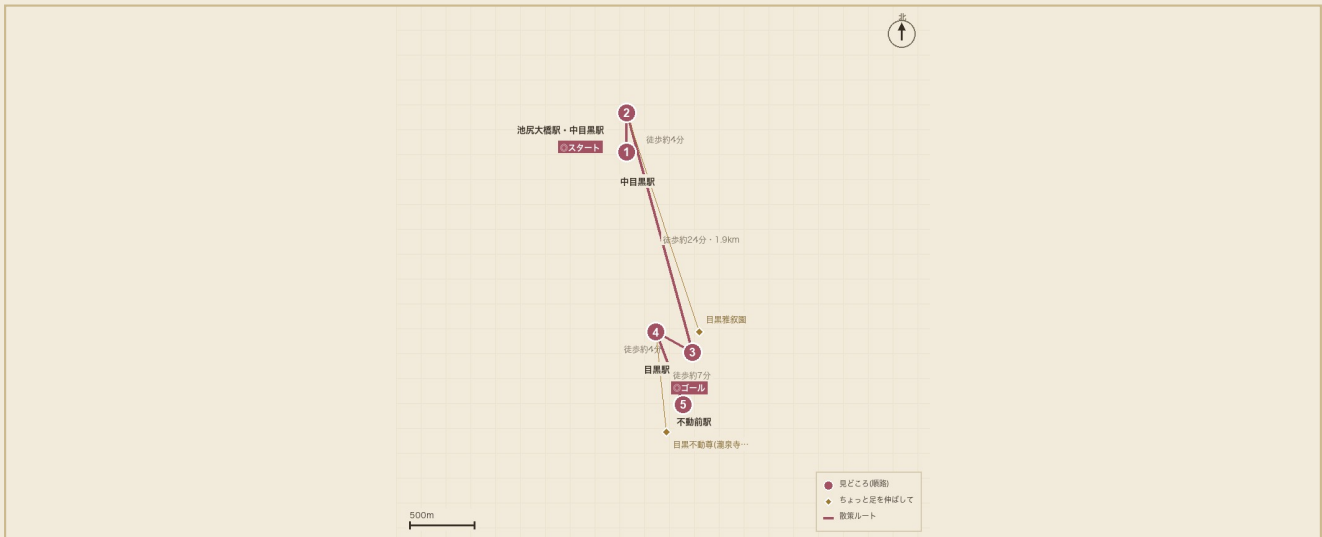
この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%93%81%E5%B7%9D%E5%AE%BF>

目黒ルート

目黒区

中目黒駅から目黒駅・不動前駅まで、富士塚跡と目黒川沿いをめぐる散歩ルート。



起点: 東急東横線 中目黒駅

終点: 東急目黒線 不動前駅

徒歩距離目安: 約3.0km

順路

- ① 目黒新富士 → 目黒新富士跡 (滞在目安 約10分)
- ② 目黒元不二 → 上目黒氷川神社(浅間神社を合祀) (滞在目安 約15分)
- ③ 目黒千代か池 → 千代が池跡 (滞在目安 約10分)
- ④ 目黒太鼓橋夕日の岡 → 太鼓橋(目黒川) (滞在目安 約10分)
- ⑤ 目黒爺々が茶屋 → 目黒不動尊参道周辺 (滞在目安 約10分)

この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →

エリアのグルメ

適切なライセンスの写真が見つからなかったため未掲載です

とんかつ

とんき 目黒本店

昭和14年(1939)創業、行列の絶えない目黒の老舗とんかつ店。三度づけの衣とかつ切りの美しさで知られ、多くの著名人にも愛されてきました。

目黒区下目黒1-1-2

1

目黒新富士

New Fuji, Meguro

安政4年(1857)4月 / No.75(太田記念美術館リスト番号)



築山は失われ痕跡もほとんど残っていないため、適切な現地写真が見つからず未掲載です

歌川広重「名所江戸百景 目黒新富士」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

浮世絵を読み解く

文政12年(1829)、旗本・近藤重蔵が自邸に築いた人工の富士山「新富士」を描いた一枚。手前に築山を登る参詣者たち、奥に本物の富士山を配し、見立ての妙を楽しませる構図です。

最寄り駅: 東急東横線 中目黒駅から徒歩10分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

目黒新富士

いまの場所

目黒新富士跡

目黒区中目黒2丁目付近

歴史

本物の富士山に登れない江戸庶民のために、富士山を模した小さな山(富士塚)を築いて疑似登山を叶えたのが「富士講」という信仰です。この新富士は昭和34年(1959)まで残っていましたが、現在は跡地に自然石が残るのみで、普通の住宅地に溶け込んでいます。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9B%AE%E9%BB%92%E5%AF%8C%E5%A3%AB>

2

目黒元不二

Original Fuji in Meguro

安政4年(1857)4月 / No.76(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 目黒元不二」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by yamai36, Wikimedia Commons(CC BY 3.0)

浮世絵を読み解く

文化9年(1812)、新富士より早く築かれた「元富士」を描いた一枚。新富士に対して「元祖」を名乗るその名の通り、坂の上にそびえる築山を仰ぎ見る構図です。

最寄り駅: 東急東横線・田園都市線 池尻大橋駅・中目黒駅から徒歩12分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

目黒元不二

いまの場所

上目黒氷川神社(浅間神社を合祀)

目黒区大橋2-16-21

歴史

目切坂の上に築かれたこの元富士は、新富士より17年古い、目黒で最初の富士塚でした。取り壊された後、明治21年(1888)に山頂に祀られていた浅間神社が近くの上目黒氷川神社に遷座し、今もその境内社として大切に祀られています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

目黒雅叙園

徒歩15分ほど

昭和6年(1931)創業、絢爛豪華な装飾で知られる結婚式場・ホテル。「昭和の竜宮城」とも呼ばれた名建築の面影を今に伝えます。

[この場所をGoogleマップで見ると](#)浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9B%AE%E9%BB%92%E5%AF%8C%E5%A3%AB>

3

目黒千代か池

Chiyogaike Pond, Meguro

安政4年(1857)4月 / No.94(太田記念美術館リスト番号)



池は埋め立てられ官庁街となっており、適切な現地写真が見つからず未掲載です

歌川広重「名所江戸百景 目黒千代か池」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

浮世絵を読み解く

目黒川を見下ろす高台にあった池「千代か池」を描いた一枚。桜の木がぼんやりと水面に映り込む、広重には珍しい繊細な情景表現が特徴です。

最寄り駅: JR・東急目黒線 目黒駅から徒歩10分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

目黒千代か池

いまの場所

千代が池跡

目黒区目黒1丁目付近

歴史

池の名は、南北朝時代の武将・新田義興の侍女「千代」が、主君の討死を知ってこの池に身を投げたという伝説に由来します。池は昭和初期まで残っていましたが、その後埋め立てられ、現在は目黒区の官庁街の一角となり、面影は広重の絵の中にしか残っていません。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9B%AE%E9%BB%92%E5%8C%BA>

4

目黒太鼓橋夕日の岡

Meguro Drum Bridge and Sunset Hill

安政4年(1857)4月 / No.83(太田記念美術館リスト番号)



安政期

石造りの太鼓橋自体は失われ、適切な現地写真が見つからず未掲載です

歌川広重「名所江戸百景 目黒太鼓橋夕日の岡」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

浮世絵を読み解く

目黒川に架かる石造りのアーチ橋「太鼓橋」と、その名の由来となった太鼓のように丸い橋の形を描いた一枚。奥にそびえる夕日の岡は、紅葉が夕日に映える名所として親しまれました。

最寄り駅: JR・東急目黒線 目黒駅から徒歩7分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

目黒太鼓橋夕日の岡

いまの場所

太鼓橋(目黒川)

目黒区中目黒1丁目・下目黒1丁目

歴史

地震に弱い石造りのアーチ橋は江戸では珍しく、この太鼓橋も大正9年(1920)には鉄橋に架け替えられました。現在の目黒川は護岸整備された都市河川となり、江戸期の石橋の面影はありませんが、「太鼓橋」の名は今も交差点名として残っています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして



目黒不動尊(瀧泉寺)

徒歩15分ほど

江戸五色不動のひとつに数えられる天台宗の名刹。かつて茶屋が立ち並んだ参道は、今も商店街として賑わいを伝えています。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9B%AE%E9%BB%92%E5%B7%9D>

5

目黒爺々が茶屋

Grandpa's Teahouse in Meguro

安政4年(1857)4月 / No.84(太田記念美術館リスト番号)



安政期

茶屋自体は現存せず、適切な現地写真が見つからず未掲載です

歌川広重「名所江戸百景 目黒爺々が茶屋」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

浮世絵を読み解く

目黒不動尊へ向かう街道沿いの茶屋で、旅人たちが一服する様子を描いた一枚。田畑の向こうに富士山を望む、江戸郊外らしいのどかな風景です。

最寄り駅: 東急目黒線 不動前駅から徒歩5分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

目黒爺々が茶屋

いまの場所

目黒不動尊参道周辺

目黒区下目黒3丁目付近

歴史

「爺々が茶屋」は目黒不動(瀧泉寺)へ参詣する人々のための、街道沿いの休み処のひとつでした。目黒不動は江戸五色不動のひとつに数えられる名刹で、鷹狩り好きの将軍・徳川家光にも縁が深い寺です。茶屋そのものは残っていませんが、不動尊の参道は今も商店街として、当時と同じ「参拝と憩い」の役割を果たし続けています。

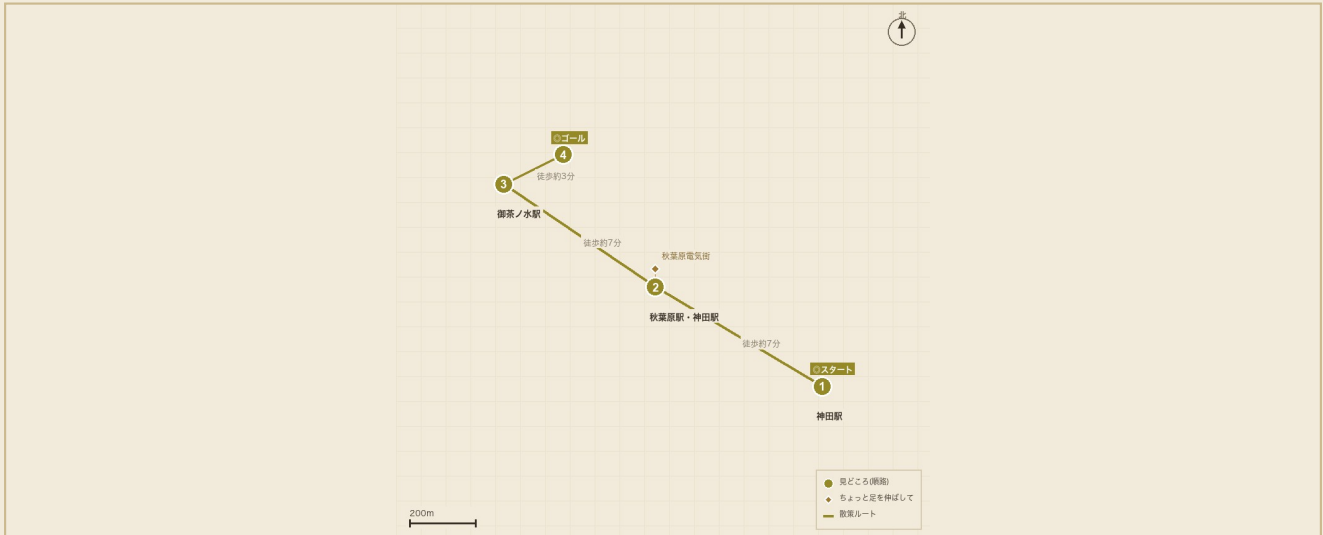
この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%80%A7%E6%B3%89%E5%AF%BA>

神田ルート

千代田区

神田駅から御茶ノ水駅まで、神田明神・湯島聖堂・秋葉原をめぐる散歩ルート。



起点: JR・東京メトロ 神田駅

終点: JR 御茶ノ水駅

徒歩距離目安: 約2.2km

順路

- ① 神田紺屋町 → 神田紺屋町跡(東神田・岩本町エリア) (滞在目安 約10分)
- ② 筋違内八ツ小路 → 万世橋・秋葉原周辺 (滞在目安 約15分)
- ③ 昌平橋聖堂神田川 → 湯島聖堂・昌平橋 (滞在目安 約15分)
- ④ 神田明神曙之景 → 神田明神(神田神社) (滞在目安 約15分)

この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →

エリアのグルメ



あんこう鍋

いせ源

天保元年(1830)創業、あんこう料理専門店として知られる老舗。現在の建物は昭和5年(1930)築で、東京都選定歴史的建造物にも選ばれています。

千代田区神田須田町1-11-1

1

神田紺屋町

Dyers' Quarter, Kanda

安政4年(1857)11月 / No.79(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 神田紺屋町」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

浮世絵を読み解く

染め上がった反物を高い物干し台にずらりと干した、染物問屋の情景を描いた一枚。色とりどりの布が旗のようにはためく合間から富士山が覗く、大胆で装飾的な構図が魅力です。

最寄り駅: JR・東京メトロ 神田駅から徒歩10分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

神田紺屋町

いまの場所

神田紺屋町跡(東神田・岩本町エリア)

千代田区東神田・岩本町付近

歴史

「紺屋町」は染物職人(紺屋)が集まって暮らした江戸の職人町のひとつでした。昭和9年(1934)の住居表示変更で「紺屋町」の地名自体は姿を消し、現在は東神田・岩本町として、染物とは無縁のオフィス街になっています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E7%94%B0%E7%B4%BA%E5%B1%8B%E7%94%BA>

2

筋違内八ツ小路

Yatsukōji, Inside Sujikai Gate

安政4年(1857)11月 / No.81(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 筋違内八ツ小路」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)

Photo by 妖精書士, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

筋違御門の内側に広がる広場「八ツ小路」を描いた一枚。8本もの道が集まる交差点は江戸有数の広さを誇り、大名行列や物売り、旅人たちで大変な賑わいを見せています。

最寄り駅: JR 秋葉原駅・神田駅からすぐ 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

筋違内八ツ小路

いまの場所

万世橋・秋葉原周辺

千代田区外神田1丁目付近

歴史

「八ツ小路」の名は、この広場から外堀・神田川に架かる複数の橋(常盤橋・鎌倉河岸・昌平橋など)へ向かう道が放射状に集まっていたことに由来します。明治になり筋違御門は取り壊され、その石材は最初の万世橋建設に転用されました。現在この一帯は、世界的な電気街・アニメの聖地として知られる秋葉原に姿を変えています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

秋葉原電気街

徒歩3分ほど

戦後の闇市から発展した世界的な電気街。近年はアニメ・ゲーム関連のショップも集まり、「オタク文化の聖地」としても世界中から観光客を集めています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%8B%E8%91%89%E5%8E%9F>

3

昌平橋聖堂神田川

Seid ō and Kanda River from Sh ō heibashi Bridge

安政4年(1857)9月 / No.72(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 昌平橋聖堂神田川」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Reggaeman, Wikimedia Commons(CC BY-SA 3.0)

浮世絵を読み解く

昌平橋の上から神田川を見下ろす構図で、夏の雨に打たれながら材木を運ぶ川船を描いた一枚。対岸には湯島聖堂の白壁が続いています。シリーズ中、雨を描いた数少ない作品のひとつです。

最寄り駅: JR・東京メトロ 御茶ノ水駅から徒歩 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

昌平橋聖堂神田川

いまの場所

湯島聖堂・昌平橋

千代田区外神田2-1-14

歴史

湯島聖堂は元禄3年(1690)、五代将軍・徳川綱吉が儒学を学ぶために建てた孔子廟です。後に幕府の学問所「昌平坂学問所」となり、明治以降は東京大学や日本の近代教育制度の源流のひとつとなりました。昌平橋の名も、孔子の生誕地・中国山東省の昌平郷にちなんで名付けられたものです。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B9%AF%E5%B3%B6%E8%81%96%E5%A0%82>

4

神田明神曙之景

Dawn at Kanda Myōjin Shrine

安政4年(1857)9月 / No.80(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 神田明神曙之景」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Fg2, Wikimedia Commons(Public Domain)

浮世絵を読み解く

夜明けの神田明神で、まだ茶屋の縁台も空っぽの中、神職・巫女・下働きの3人が朝の見回りを始める静かな一枚。前年の安政大地震(1855)からの復興を願う気持ちが、夜明けの光に込められていると言われます。

最寄り駅: JR・東京メトロ 御茶ノ水駅から徒歩5分 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

神田明神曙之景

いまの場所

神田明神(神田神社)
千代田区外神田2-16-2

歴史

神田明神(神田神社)は、神田・日本橋・秋葉原など108の町を氏子に持つ「江戸総鎮守」です。5月の神田祭は、山王祭と並ぶ「江戸三大祭」のひとつとして、隔年で今も盛大に行われています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E7%94%B0%E7%A5%9E%E7%A4%BE>

赤坂・四谷ルート

港区・新宿区・千代田区

虎ノ門から赤坂・四谷を抜けて新宿御苑周辺まで、坂道の多い武家地の名残をたどる散歩ルート。



起点: 東京メトロ 虎ノ門駅

終点: 都営新宿線・丸ノ内線 新宿三丁目駅

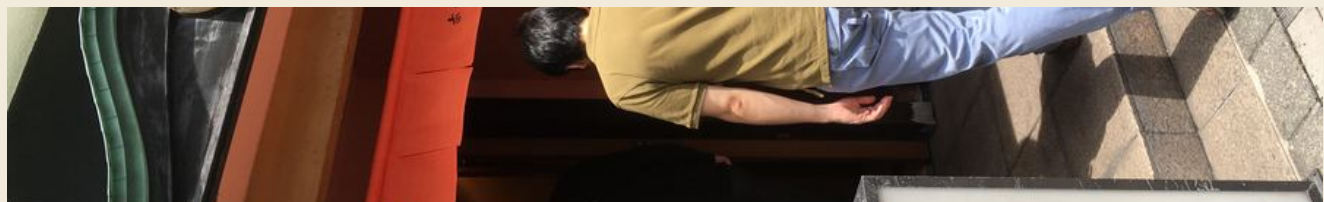
徒歩距離目安: 約4.6km

順路

- ① 虎の門外あふひ坂 → 葵坂跡(虎ノ門一丁目付近) (滞在目安 約10分)
- ② 赤坂桐畑 → 溜池跡(溜池山王駅周辺) (滞在目安 約10分)
- ③ 赤坂桐畑雨中夕けい → 溜池跡(溜池山王駅周辺) (滞在目安 約10分)
- ④ 紀の国坂赤坂溜池遠景 → 紀伊国坂 (滞在目安 約10分)
- ⑤ 市ヶ谷八幡 → 市谷亀岡八幡宮 (滞在目安 約20分)
- ⑥ 四ツ谷内藤新宿 → 新宿三丁目・新宿御苑周辺 (滞在目安 約15分)

この順路でGoogleマップの徒歩ルートを開く →

エリアのグルメ



うなぎ

赤坂ふきぬき

大正12年(1923)創業のうなぎ料理専門店。屋号「ふきぬき」は先代が岐阜の料亭で授かった「富貴貫(ふきぬき)」の字を当てたもので、100年近く赤坂の地で炭火焼きのうなぎを提供し続けています。

港区赤坂3-8-11

1

虎の門外あふひ坂

Aoi Slope, Outside Toranomon Gate

安政4年(1857)11月 / No.117(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 虎の門外あふひ坂」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン) Photo by Soramimi, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

極寒の夜、虎ノ門の外堀沿いに続く葵坂を、提灯を手に凍えながら歩く人々を描いた一枚。手前の二人は職人の徒弟で、真冬に神社仏閣を裸参りする「寒稽古」の途中とされ、地面には湯気の立つ落とし物まで克明に描かれています。

最寄り駅: 東京メトロ 虎ノ門駅から徒歩すぐ 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

虎の門外あふひ坂

いまの場所

葵坂跡(虎ノ門一丁目付近)
港区虎ノ門1丁目付近

歴史

葵坂は江戸城外堀(現在の桜田通り・外堀通り交差点付近)にあった坂道で、坂の周辺一帯が「赤坂葵町」と呼ばれたことに名の由来があります。外堀は明治以降に埋め立てられ、坂そのものも都市開発でほぼ消滅しましたが、地下鉄駅名や町名に「虎ノ門」の名だけが残っています。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%99%8E%E3%83%8E%E9%96%80>

2

赤坂桐畑

The Paulownia Field at Akasaka

安政3年(1856)4月 / No.30(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 赤坂桐畑」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by MaedaAkihiko, Wikimedia Commons(CC0)

浮世絵を読み解く

外堀の一部だった溜池のほとりに広がる桐畑を描いた一枚。江戸時代初期に土手の土留めとして植えられたと伝わる二本の桐の木が手前にそびえ、対岸には大名屋敷の藁が連なっています。

最寄り駅: 東京メトロ 溜池山王駅から徒歩 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

赤坂桐畑

いまの場所

溜池跡(溜池山王駅周辺)

港区赤坂1丁目・永田町2丁目付近

歴史

溜池は江戸城西側の外堀を兼ねた人工の池で、かつては江戸市中への上水源のひとつでもありました。明治以降に埋め立てられて道路となり、今ではその名を「溜池山王」の駅名に残すのみ。桐の木も池も失われ、現在は首都高速と高層ビルが行き交うオフィス街に姿を変えています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%BA%9C%E6%B1%A0>

3

赤坂桐畑雨中夕けい

Night Rain at the Paulownia Grove, Akasaka

安政6年(1859)4月 / No.118(太田記念美術館リスト番号)



二代歌川広重「名所江戸百景 赤坂桐畑雨中夕けい」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by MaedaAkihiko, Wikimedia Commons(CC0)

浮世絵を読み解く

同じ桐畑を、雨に畑る夕暮れどきに描き直した一枚。手前の桐の枝葉が画面いっぱいに広がり、雨脚を表す繊細な斜めの摺り(バレン摺り)が、しっとりとした夜の空気を伝えています。

最寄り駅: 東京メトロ 溜池山王駅から徒歩 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

赤坂桐畑雨中夕けい

いまの場所

溜池跡(溜池山王駅周辺)

港区赤坂1丁目・永田町2丁目付近

歴史

初代広重は安政5年(1858)に没しましたが、「名所江戸百景」は好評につき続刊が望まれ、二代広重(初代の門人・重宣)が跡を継いで欠けていた図を補いました。本作はその代表例で、初代の「赤坂桐畑」(前図)と同じ場所を、師の死後に弟子が描き足した一枚として知られています。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%8C%E5%B7%9D%E5%BA%83%E9%87%8D_\(2%E4%BB%A3%E7%9B%AE\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%8C%E5%B7%9D%E5%BA%83%E9%87%8D_(2%E4%BB%A3%E7%9B%AE))

4

紀の国坂赤坂溜池遠景

Kinokuni Hill and Distant View of Akasaka Tameike

安政4年(1857)9月 / No.35(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 紀の国坂赤坂溜池遠景」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by ITA-ATU, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

紀伊徳川家の屋敷脇を通る坂道を、大名行列がゆっくりと上ってゆく情景。坂の下には溜池と対岸の町並みが遠く広がり、手前の木々の緑と奥の水面の対比が涼やかな一枚です。

最寄り駅: 東京メトロ 赤坂見附駅から徒歩8分 滞在目安: 約10分

広重が描いた場所

紀の国坂赤坂溜池遠景

いまの場所

紀伊国坂

港区元赤坂2丁目付近

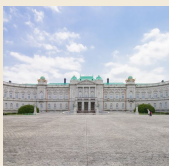
歴史

「紀伊国坂」の名は、坂の西側に御三家のひとつ紀伊徳川家の広大な中屋敷があったことに由来します。その屋敷跡地は明治以降皇室に献上され、現在は迎賓館赤坂離宮と赤坂御用地となっています。坂そのものは今も同じ場所に残り、迎賓館の石垣沿いを歩くことができます。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

迎賓館赤坂離宮

徒歩3分ほど



明治42年(1909)完成、旧東宮御所として建てられたネオ・バロック様式の洋館。紀伊徳川家中屋敷の跡地に立ち、日本を代表する迎賓施設として国賓・公賓を迎えています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B4%80%E4%BC%8A%E5%9B%BD%E5%9D%82>

5

市ヶ谷八幡

Ichigaya Hachiman Shrine

安政5年(1858)10月 / No.42(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 市ヶ谷八幡」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Doricono, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

急な石段の上に鳥居がそびえ、参道脇には大きな松の木が枝を広げる情景。石段を上り下りする参詣者たちの姿が小さく描かれ、境内からの眺めの良さが伝わってきます。

最寄り駅: JR・都営新宿線 市ヶ谷駅から徒歩3分 滞在目安: 約20分

広重が描いた場所

市ヶ谷八幡

いまの場所

市谷亀岡八幡宮

新宿区市谷八幡町15

歴史

太田道灌が江戸城築城の際、鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請して文明11年(1479)に創建したと伝わる古社。江戸時代は徳川將軍家からも篤く信仰され、現在も急な石段と正面の大きな鳥居は当時とほぼ変わらぬ姿で残っています。境内には縁結びで知られる茶ノ木稲荷神社も鎮座します。

この場所をGoogleマップで見る →

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B8%82%E8%B0%B7%E4%BA%80%E5%B2%A1%E5%85%AB%E5%B9%A1%E5%AE%AE>

6

四ツ谷内藤新宿

Naitō Shinjuku, Yotsuya

安政4年(1857)11月 / No.26(太田記念美術館リスト番号)



歌川広重「名所江戸百景 四ツ谷内藤新宿」国立国会図書館デジタルコレクション(パブリックドメイン)



Photo by Kentin, Wikimedia Commons(CC BY-SA 4.0)

浮世絵を読み解く

宿場の路上に佇む二頭の馬と、その足元に転がる馬糞の玉までもをあえて克明に描いた、シリーズ中でも異色の一枚。手前に大きく描かれた馬の脚が独特の遠近感を生み、飾らない宿場の日常を伝えています。

最寄り駅: 東京メトロ・都営新宿線 新宿三丁目駅から徒歩すぐ 滞在目安: 約15分

広重が描いた場所

四ツ谷内藤新宿

いまの場所

新宿三丁目・新宿御苑周辺
新宿区新宿3丁目付近

歴史

内藤新宿は元禄11年(1698)、甲州街道の最初の宿場として開設された、江戸四宿(品川・板橋・千住・新宿)のひとつ。もとは信濃高遠藩・内藤家の下屋敷地で、その広大な屋敷跡地は明治以降「新宿御苑」として整備され、現在は都心有数の庭園として親しまれています。宿場としての賑わいは新宿三丁目・新宿通り一帯に受け継がれています。

歩いて行けるならちょっと足を伸ばして

太宗寺

徒歩7分ほど



慶長元年(1596)開山と伝わる浄土宗の寺院。内藤家の菩提寺としても知られ、境内には江戸六地藏の一つに数えられる銅造地藏菩薩坐像が今も残っています。

[この場所をGoogleマップで見る →](#)

浮世絵原画・解説: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%86%85%E8%97%A4%E6%96%B0%E5%AE%BF>